第 137 次調査

例　言

(1)　本報告（『有田47』のうち「有田遺跡群第137次調査報告」は、福岡市教育委員会が、昭和63年度の国庫補助事業として、早良区有田1丁目8-4で個人住宅建設に先だって調査を実施した有田第137次調査の発掘調査報告書である。

(2)　発掘調査は上記の主体により行われ、調査は小林義彦、山崎龍雄が担当して行い、報告書の作成は山崎が行った。

(3)　遺構の呼称は記号化し、柵跡→SA、建物跡→SB、溝状遺構→SD、土坑→SK、柱穴→SP、性格不明遺構→SXとしている。

(4)　現場の遺構の実測・撮影は小林が、遺物の実測は山崎と技術員の平川敬治が、写真撮影は山崎が行った。

(5)　本報告に使用した図面の浄書は山崎が行った。

(6)　本報告に使用した方位は磁北であり、真北とは6°18′西偏する。

(7)　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖に基づいている。

(8)　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

(9)　本報告の執筆・編集は山崎が行った。

調査基本情報

遺　跡　名	有田遺跡群	調　査　次　数	１３７	調　査　略　号	ART－137
調 査 番 号	８８０４	分布地図図幅名	No.82原	遺跡登録番号	０３０９
申請地面積	162㎡	調査対象面積	162㎡	調　査　面　積	134㎡
調 査 期 間	昭和63（1988）年4月15日～6月6日			事前審査番号	62－2－266
調　査　地	福岡市早良区有田1丁目8－4				

1. はじめに

1） 調査に至る経緯

早良区有田・小田部・南庄地区に所在する有田遺跡群は、市内でも有数の重要遺跡として、昭和52年度から国庫補助金を受けて、開発により破壊を避けられない個人専用住宅や小規模開発に対しても発掘調査を行い、記録保存を図って来た。今回の調査は昭和62年10月１日に、早良区有田1丁目8-4に個人より住宅改築の申請（事前審査番号62-2-266）を受けたもので、前年度実施した隣接地の調査第132次調査から遺跡の存在が予想されたので、家屋の解体後調査を行うこととなった。発掘調査は平成元年度の国庫補助事業として昭和63年(1988)4月15日～6月6日まで行った。整理・報告書作成は平成21年度に国庫補助事業として行った。調査にあたっては申請者及び関係各位、地元の方々にご理解と協力を賜った。末尾ではあるが記して感謝の意を表する次第である。

2） 調査の組織

【昭和63年度調査】

調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課	
調査総括	文化部埋蔵文化財課課長	柳田純孝
	同課第2係長	飛高憲雄
調査庶務	同課第1係係員	岸田　隆
調査担当	同課第2係係員	小林義彦、山崎龍雄

【平成21年度整理】

整理総括	文化財部埋蔵文化財第2課課長	田中寿夫
	同課調査第1係長	杉山富雄
整理庶務	文化財部文化財管理課管理係	古賀とも子
整理担当	埋蔵文化財第2課主任文化財主事	山崎龍雄
整理作業	増永好美	

2. 調査の記録

1） 調査の概要（Fig.1・2、PL.1・3）

調査区は有田遺跡群の東南部に位置する。台地の東縁を北流する金屑川に向かってゆるく傾斜する標高約8mの台地東側緩斜面上に立地する。本調査区の東側には本報告書で報告の第132次調査、東側には第88次調査がある。調査は旧建物解体後実施したが、作業効率を上げるため、表土・作業による廃土を場外持ち出した。調査区には全域に厚さ20㎝の遺物包含層があり、包含層上面と下面の2面で遺構が検出された。この包含層は西側の第88次調査区でも検出されている。検出遺構は第1面で掘立柱建物1棟、土坑9基、溝状遺構2条、第2面は掘立柱建物4棟、柵跡2列、石組遺構1基である。申請面積は162㎡、調査面積は134㎡である。

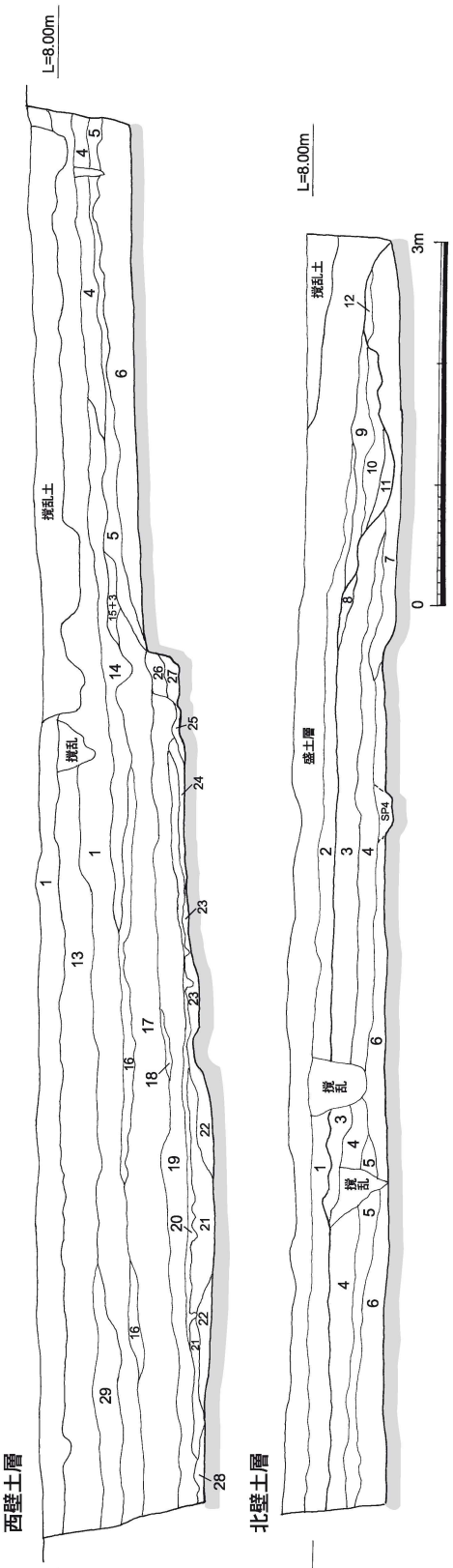
2）第1面の調査

① 掘立柱建物

SB01（Fig.3、PL.2）

主軸をN-73°-Eに取る、梁間・桁行1間×2間の建物。規模は梁間2.90m、桁行5.75mを測る。柱穴平面形は長方形または楕円形で、規模は長軸長が最大で0.8m、深さは0.25～0.3mを測る。柱径は

Fig.1 第137次調査区第1面・第2面遺構全体図（1/100）



調査区各壁土層名称

1 灰褐色(5YR4/2)土（砂混じり）
2 暗赤褐色(5YR3/4)土(砂礫混じり)
3 暗赤褐色(5YR3/2)土(褐色味強い)
4 黒褐色(5YR3/1)土
（包含層第1層）
5 黒褐色(5YR2/1)土（粘性あり）
6 黒色(5YR1.8/1)土(粘性あり)
（包含層第2層）
7 黒褐色(5YR2/1)土(やや粘質で遺物含む)
8 褐色(7.5YR4/3)土
9 暗褐色(7.5YR3/3)土(やや軟質)
10 極暗赤褐色(7.5YR2/3)砂混じり土
11 黒褐色(7.5YR2/2)土(やや粘質)
（溝埋土）
12 極暗赤褐色(5YR2/3)砂混じり土(軟質)
13 極暗褐色(5YR3/2)砂混じり土
14 黒褐色(5YR2/2)土(4層に近い　包含層第1層)
15 極暗赤褐色(5YR3/3)土（硬い）
16 赤黒色(2.5YR2/1)土(粘性あり)
17 黒褐色(5YR2/2)土（5より灰味強い）
18 黒褐色(10YR3/1)土に鈍い橙色(7.5YR6/4)細砂混入
19 黒褐色(5YR2/1)土(粘性あり5に近い)
20 黒色(5YR1.7/1)土(粘性あり)
21 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
22 明黄褐色(2.5Y6/8)粘土ブロック
23 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土(21に近い)
24 黒色(5YR1.7/1)粘質土(20に近い)
25 24に黄褐色粘土ブロック混入
26 25より黄褐色粘土ブロックの混入多い
27 黄褐色粘土ブロックと黒色土の混合
28 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
29 鈍い赤褐色(5YR4/4)土

Fig.2 調査区各壁土層（1/60）

痕跡から15～20㎝である。　**出土遺物**　各柱穴から弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器が出土している。外に黒曜石剥片や混入と思われる青磁小片が1点出土している。1・2は須恵器。1は坏の口縁部細片。2は蓋の天井部。1・2共調整は回転ナデで、8世紀前半頃のもの。3は弥生土器の丹塗り壺口縁部片利用の土製品か。直径4㎜の円孔がある。胎土は精良。1・2はP2、3はP4出土。

② 溝状遺構

SD01（Fig.5）

調査区北側で検出した南北方向の小溝。確認規模3.7m、最大幅0.6m、深さ0.13mを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗赤褐色から黒褐色土。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器などが出土した。4は須恵器坏身口縁片。調整は回転ナデ。胎土は精良。小田編年のⅠ期のもの。5～7は土師器。5は把手。外面調整はハケ目、把手部は指押え仕上げ。内面はハケ目。色調は灰褐色を呈す。6は二重口縁壺口縁部。器壁は摩滅するがヨコナデか。焼成はやや不良。古墳時代前期前半のもの。7は高坏脚部。調整はヘラミガキとナデ。裾部に円孔が開く。色調は橙色を呈す。胎土は精良。8は端部が跳ね上げの口縁部細片。9～11は弥生土器。9は須玖Ⅱ式段階の口縁が袋状を呈す壺片。復元口径8.2㎝を測る。調整はナデ。色調は鈍い黄色を呈す。胎土は精良。10は中期中頃須玖Ⅰ式期の甕口縁。色調は鈍い橙色を呈す。11は素口縁の鉢。復元口径17.0㎝を測る。色調は浅黄橙色を呈す。

SD02（Fig.5・11、PL.2）

調査区南側で検出した小溝。調査区内で完結する。規模は長さ4.55m、幅0.97m、深さ0.22mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上～中層は灰褐色土、下層は黒褐色土である。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、石鏃、石鎌、黒曜石剥片などが出土した。12は土師器の坏。復元口径13.0㎝を測る。器壁の調整は不明。二次的に被熱したのか浅橙色を呈す。9世紀前半のもの。13～17は須恵器。13は坏口縁部細片。調整は回転ヨコナデ。胎土は精良。14は坏蓋片。復元口径9.8㎝を測る。調整は回転ヨコナデで、表面に自然釉がかかる。ⅣA期のもの。15は坏身。復元口径9.0㎝を

測る。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色を呈し、胎土は精良。Ⅰ期のもの。16・17は高坏脚部。16は復元底径9.2㎝を測る。外面自然釉がかかる。脚部には長方形透かしが入る。17は脚裾部。16・17いずれも調整は回転ヨコナデ。ⅣA期のもの。18は土師器高坏脚部。調整は脚部外面ヘラケズリかナデ。色調は橙色を呈す。古墳時代前期初頭のもの。19～21は弥生土器。19は中期須玖Ⅰ式の甕の口縁部で、復元口径28.4㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面はナデ。色調は鈍い褐色を呈す。20は甕の底部。調整は外面ハケ目、内面はナデ。色調は橙色を呈す。21は器台。復元底径15.2㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面は指ナデとヨコハケ目。色調は橙色を呈す。109は内湾の石鎌片。刃部は研ぎ出す。背部は打撃調整痕が残る。残存長10.9㎝、厚み0.9㎝を測り、薄手である。石材は粘板岩。

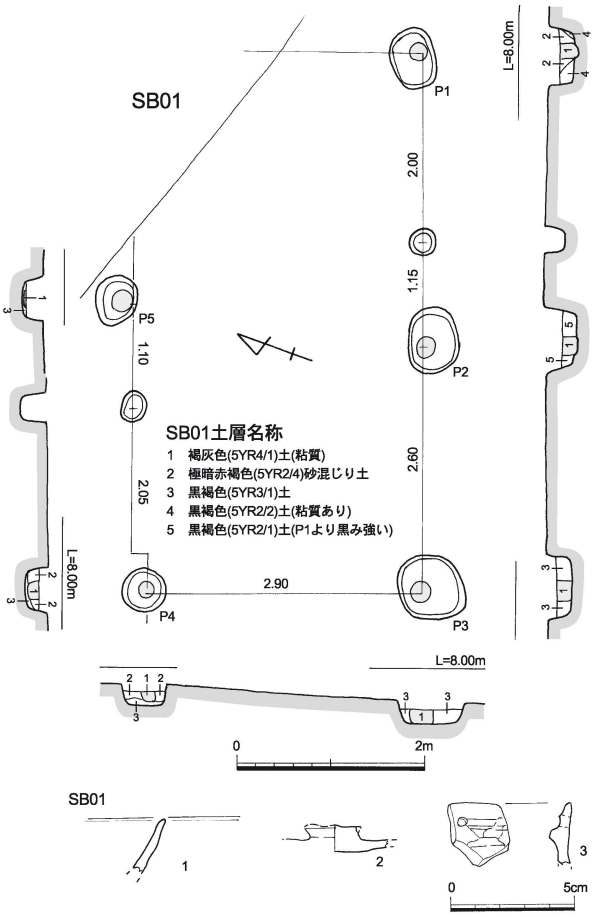


Fig.3 SB01と出土遺物（1/80・1/3）

③ 土坑

SK01（Fig.4・6、PL.2）

調査区東壁にかかる長方形の土坑。確認規模は長軸長1.3m、幅0.73m、深さ0.24mを測る。埋土は灰褐色土で暗褐色土粒子を含む。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代後期頃の須恵器と鉄滓3が出土。22は初期須恵器または陶質土器壺頸部。外面に櫛描波状文を施す。色調は灰色を呈し、胎土は精良。23は高坏の坏から脚部。器壁はやや摩滅するが脚部タテナデ。6世紀後半頃のもの。

SK02（Fig.4、PL.2）

SK01の北側で検出した楕円形状の土坑で底面にピットが入る。規模は長軸長0.97m、幅0.6m、深さは0.1m前後で浅い。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器と鉄滓2が出土。細片で図示出来ない。

SK03（Fig.4、PL.2）

中央部で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸長1.0m、短軸幅0.45m、深さ0.2mを測る。埋土は暗赤褐色から黒褐色土が主体である。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器と黒曜石剥片、鉄滓4が出土。細片で図示出来ない。

SK04（Fig.4、PL.2）

中央部で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸長1.17m、短軸幅0.47m、深さ0.18mを測る。埋土は鈍い赤褐色から黒色土である。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器と黒曜石剥片が出土。細片で図示出来ない。

SK05（Fig.4）

北側で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸長1.05m、短軸幅0.47m、深さ0.16mを測る。埋土は鈍い赤褐色から黒褐色土である。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代後期頃の須恵器と黒曜石剥片が出土。細片で図示出来ない。

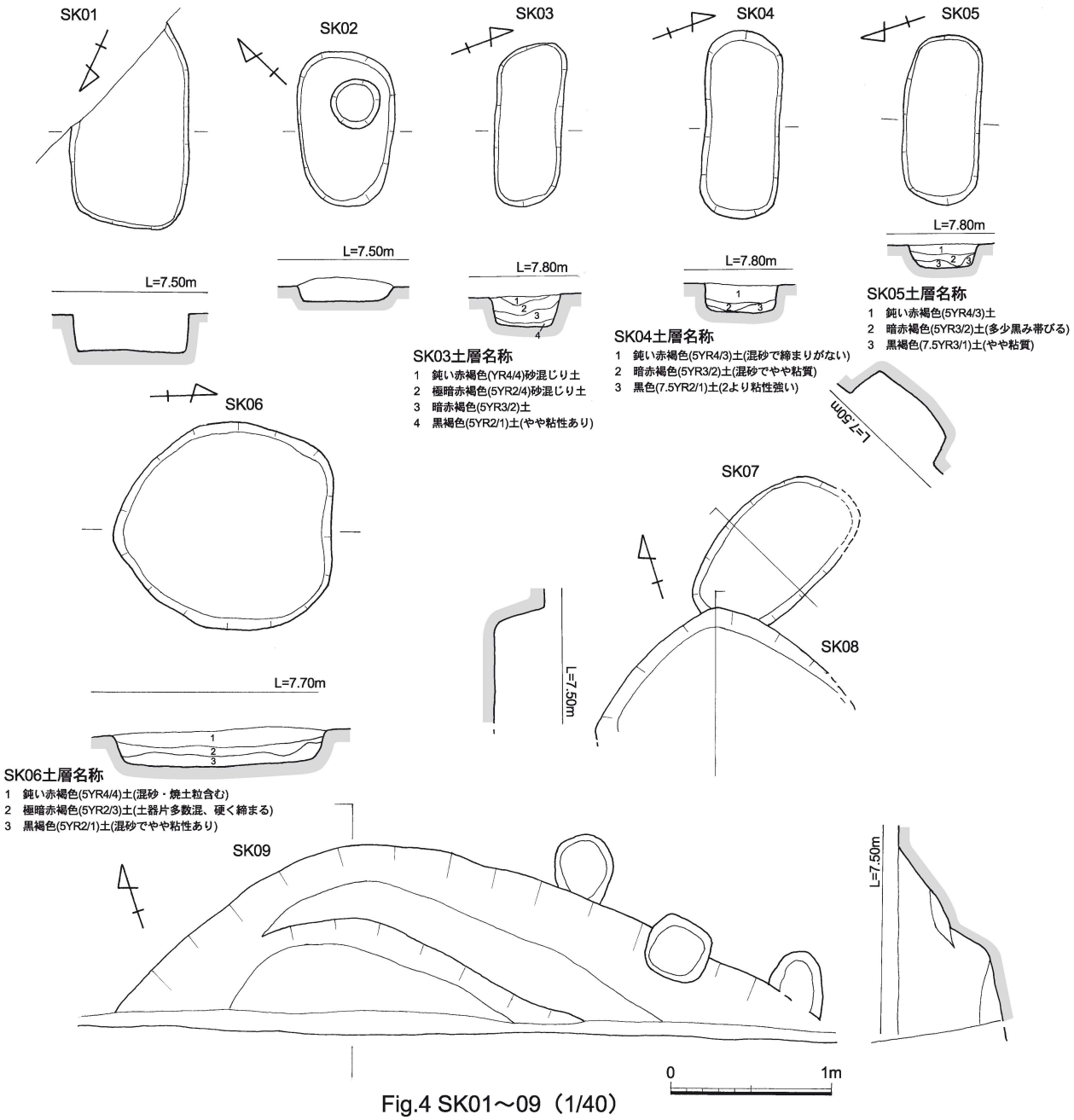


Fig.4 SK01～09（1/40）

SK06（Fig.4・6、PL.2）

南西隅で検出した平面形が不整円形を呈す土坑。規模は1.33m×1.30m、深さ0.24mを測る。埋土は鈍い赤褐色から黒褐色土である。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代後期頃迄の土師器・須恵器、石斧・黒曜石剥片が出土。24は須恵器の高坏脚部。復元底径8.6㎝を測る。裾部下部に円形透孔がある。調整は回転ヨコナデ。外面に自然釉がかかる。色調は黄灰色を呈す。形態から朝倉産の可能性がある。

SK07（Fig.4・6・11、PL.2）

調査区南側、SK08に切られる隅丸長方形状の土坑。規模は長軸長1.17m、短軸幅0.65m、深さ0.3mを測る。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代後期頃迄の土師器・須恵器、黒曜石石鏃・剥片などが出土。25～27は土師器。25は壺か鉢の口縁部細片。調整はヨコナデで、色調は鈍い橙色を呈す。26は牛角状の把手。調整はナデでハケ目が残る。色調は浅橙色を呈す。27は鉢口縁部。復元口径12.8㎝を測る。28は弥生土器。須玖Ⅱ式の甕口縁部で復元口径27.4㎝を測る。調整はナデ。色調は浅黄橙色を呈す。110は凹基式石鏃で基部を欠く。鏃身1.3㎝を測る。石材は黒曜石で縄文時代のもの。

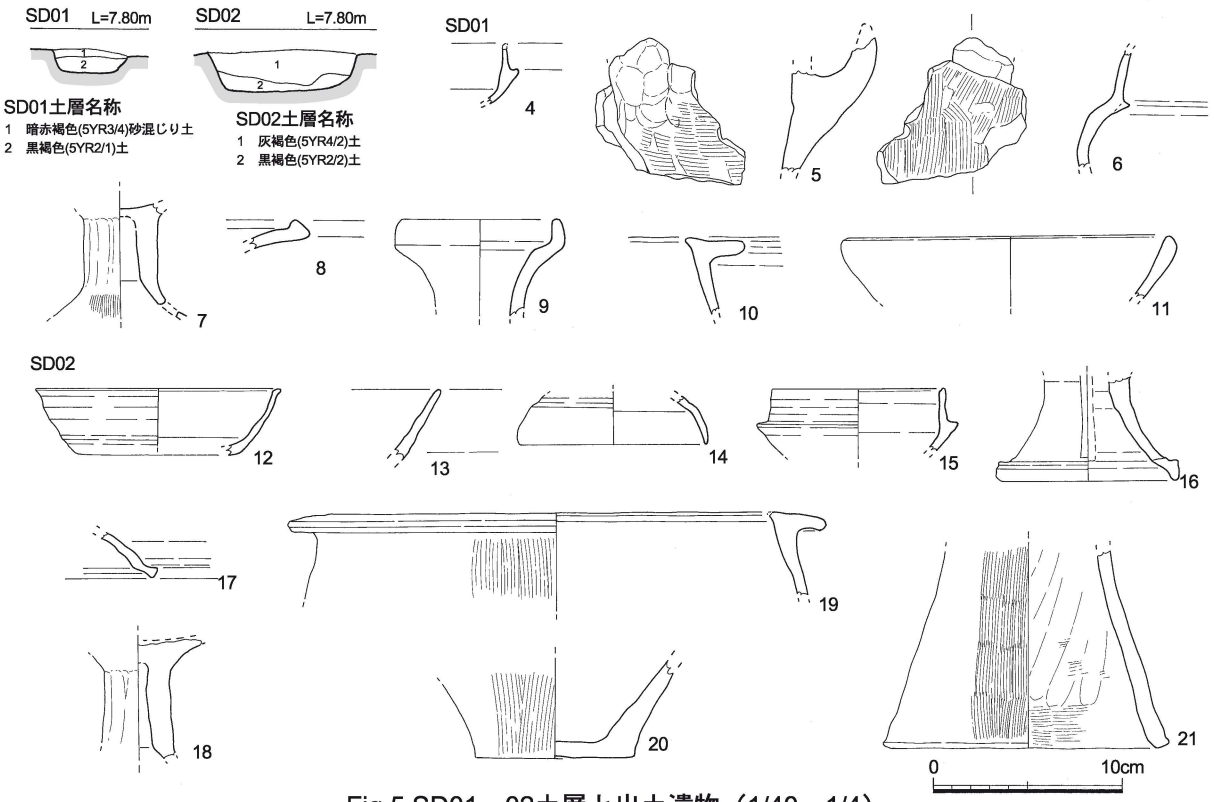


Fig.5 SD01・02土層と出土遺物（1/40・1/4）

SK08（Fig.4・6、PL.2）

調査区南壁にかかる土坑で、SK07を切る。最大深さ0.35mを測る。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、鉄滓8が出土。29は土師器椀底部。復元底径7.6cmを測る。器壁の調整は不明。10世紀前半頃のもの。30は須恵器蓋。復元口径8.8cmを測る。調整は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ。7世紀後半のもの。31は土師器甕口縁部。復元口径21.6cmを測る。器壁はやや摩滅するが内面ヘラケズリ。色調は鈍い褐色を呈す。32～37は弥生時代中期後半代の土器。32は壺口縁部。復元口径は24.4cmを測る。器壁は摩滅するがハケ目が残る。色調は浅橙色を呈す。33～35は甕。33・34は口縁部で、33は復元口径21.0cmを測る。調整は外面ハケ目、内面はヨコ・タテナデ。色調は灰白色を呈す。34は復元口径34.0cmを測る。調整は胴部内外面ハケ目、口縁部はヨコナデ。35は底部。底径6.8cmを測る。外面タテヘラミガキ、内面ナデ。外面丹塗り。36は鋤先状口縁の高坏坏部。復元口径22.6cmを測る。器壁の内外に丹塗りの痕跡が残る。37は蓋頂部。外面ハケ目で内面はナデで指痕が残る。34～37の色調は浅黄橙色を呈す。

SK09（Fig.4・6、PL.6）

調査区南壁にかかる大型土坑。規模は東西確認長4.4m、最大深さ0.65mを測る。底面北側にやや不明瞭な段を持つ。　**出土遺物**　弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、中世前半の土師器・須恵器・中国産白磁と黒曜石剥片、鉄滓などが多数出土。38は土師器小皿。復元口径9.4cm、器高1.4cmを測る。山本信夫編年の11世紀後半～12世紀初めのもの。39～45は須恵器。39は長頸壺底部か。外底部回転ケズリ、その他は回転ナデ。8世紀前半頃のもの。40・41は坏。40は復元口径10.0cmを測る。Ⅴ期のもの。41は細片。調整は回転ナデ。色調は暗灰色を呈す。42は蓋で復元口径10.6cmを測る。天井部外面は回転ケズリ、その他は回転ナデ。Ⅴ期のもの。43・44は蓋口縁部。いずれも7世紀後半のもの。45は甕口縁部。口縁部外面斜めのヘラ切り沈線。46は小型の把手。胎土は精良。

④ ピット出土遺物（Fig.7・11、PL.4・6・7）

47～50はSP01出土。47は須恵器坏の底部細片。底部ケズリ後ナデ。48は瓦器椀底部。11世紀代

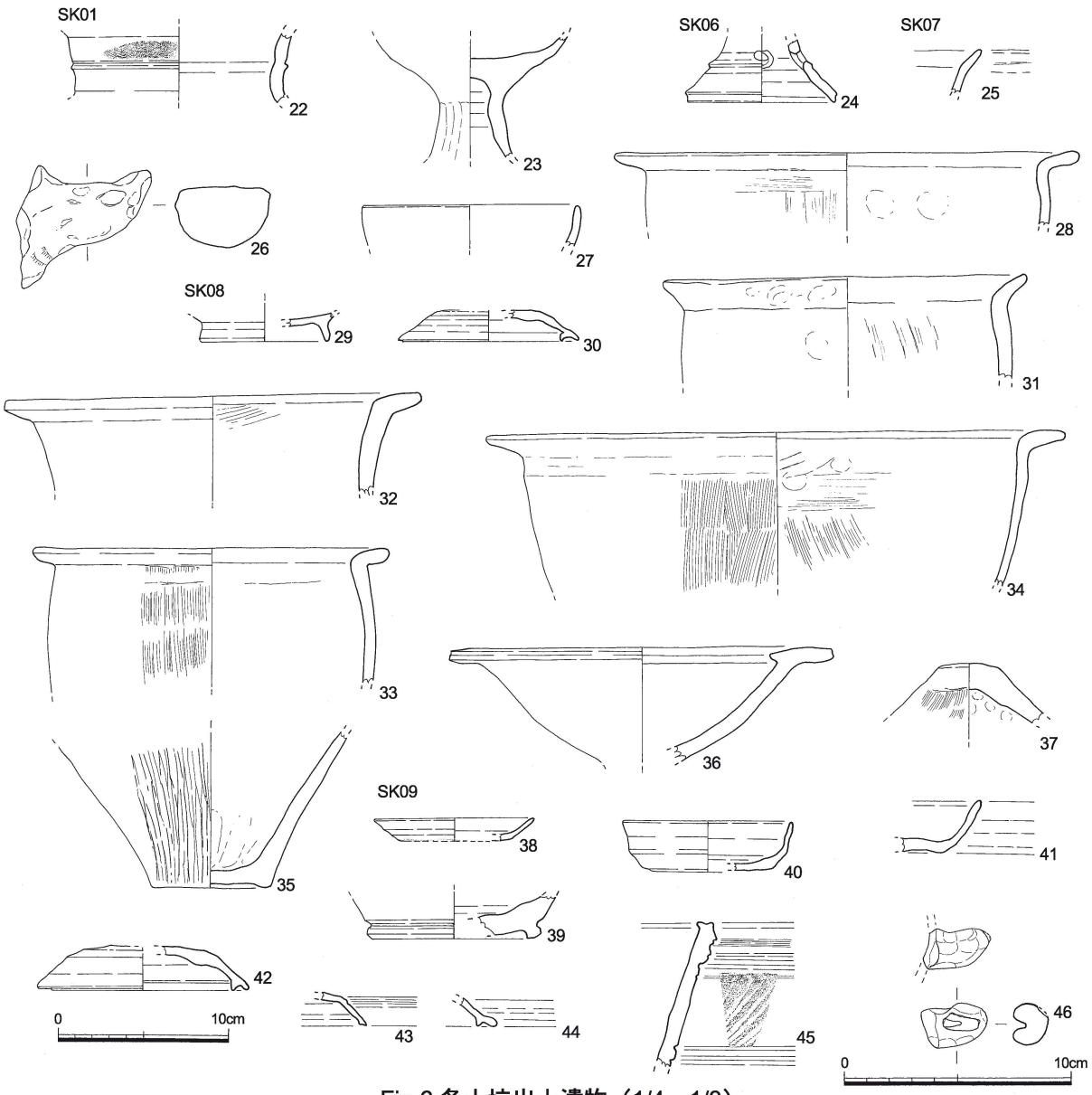


Fig.6 各土坑出土遺物（1/4・1/3）

のもの。49は土師器椀底部。形態から10世紀後半から11世紀初めか。50は管状土錘。先端を一部欠損。全長3.0㎝、最大径1.5㎝を測る。51はSP10出土。筒状の器台。ほぼ完存で口径6.8～7.0㎝、器高12.4㎝を測る。指押え仕上げ。52はSP11出土。弥生土器甕口縁部。器壁の調整は不明。須玖Ⅰ式のもの。53・54はSP12出土。逆L字口縁の甕。53は細片。54は復元口径32.4㎝を測る。調整はナデで焼成は不良。55はSP15出土。鉢で復元口径11.2㎝を測る。56はSP16出土。鋤先状口縁甕細片。調整はヨコナデ。57はSP19出土。須恵器蓋片。7世紀後半のもの。58はSP23出土。須恵器蓋細片。7世紀後半のもの。59はSP24出土。土師器の牛角状の把手。60はSP31出土。弥生土器甕口縁部。調整は外面ハケ目とヨコナデ。須玖Ⅱ式のもの。61・62はSP35出土の須恵器。61は坏口縁部。Ⅱ期のものか。62は蓋細片。７世紀前半Ⅴ期のもの。63はSP38出土。中世土師器鍋口縁部。調整は外面ナデ、内面ヨコハケ目。14～15世紀頃のもの。64はSP44出土。須恵器蓋細片。７世紀後半頃のもの。65はSP49出土。弥生土器甕口縁部細片。口唇部にヘラで刻目を付ける。器壁の外面に赤色顔料が残る。66はSP51出土。弥生土器甕底部。復元底径8.0㎝を測る。67はSP56出土。外面丹塗りの瓢形土器片。68はSP60出土。土師器壺の口縁部か。復元口径17.2㎝を測る。調整はヨコナデ。69はSP63出土。須恵器坏身細片。70・71はSP64出土。70は須恵器の小型の坏身片。71は土師器鉢。復元口径

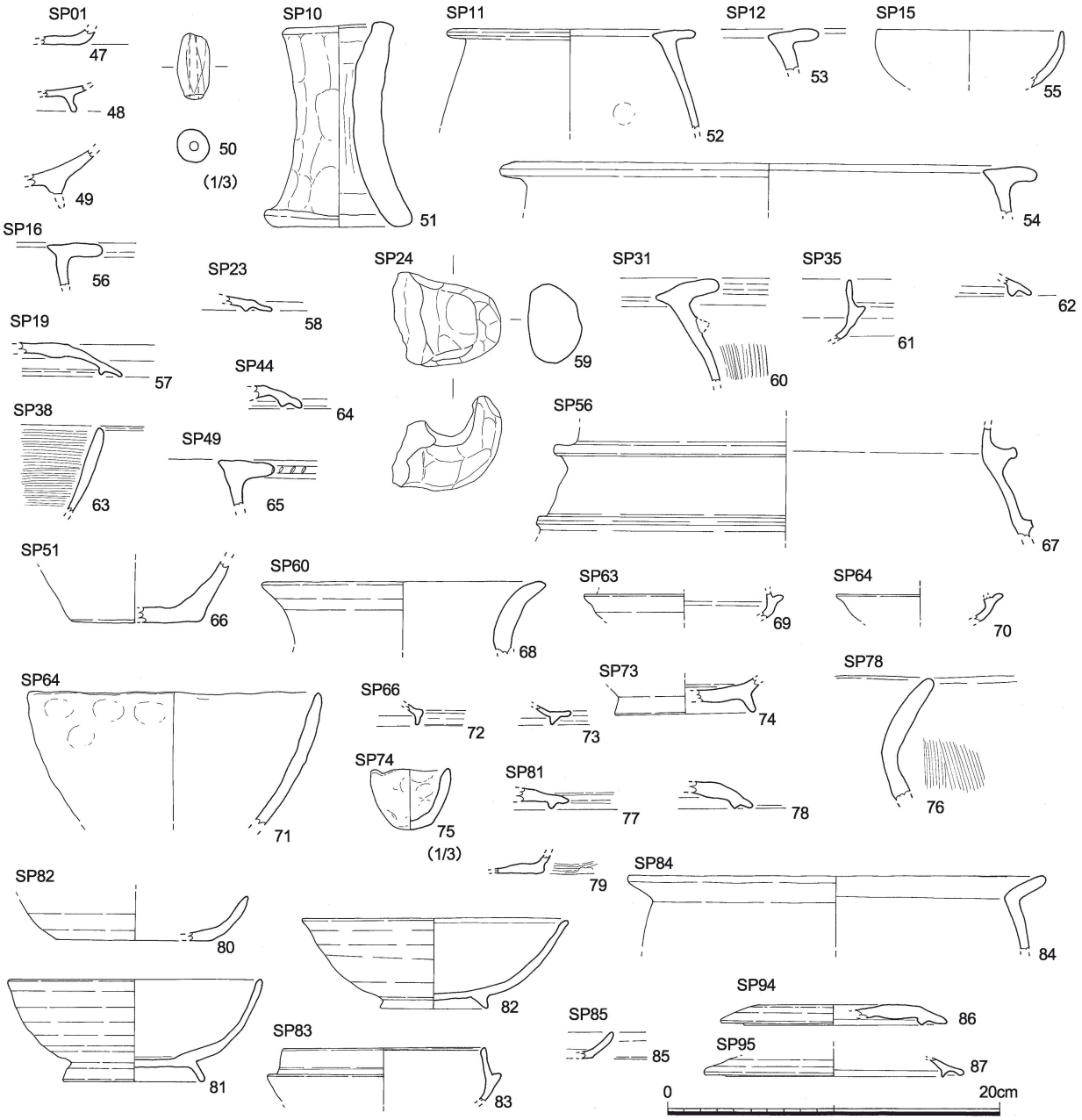


Fig.7 第1面ピット出土遺物（1/4・1/3）　※50・75は縮尺1/3

17.8㎝を測る。器壁は摩滅・剥落する。72・73はSP66出土。須恵器蓋口縁部細片。7世紀後半頃のもの。74はSP73出土。土師器椀底部。復元高台径8.6㎝を測る。調整は回転ナデ。10世紀中頃のもの。75はSP74出土。手捏のミニチュア土器鉢。復元口径3.4㎝、器高2.7㎝を測る。76はSP78出土。土師器の甕口縁部で口縁内外面黒斑がある。胴外面はハケ目。77～79はSP81出土。77・78は須恵器蓋細片。7世紀後半のもの。79は土師器坏底部細片。8世紀前半頃のものか。80～82はSP82出土。80・81は土師器。80は坏底部で外底部糸切り。12世紀末～13世紀初のもの。81は椀で復元口径15.2㎝、器高6.1㎝を測る。調整はナデ。口縁部黒斑がある。11世紀前半頃のもの。82は黒色土器A類。復元口径16.0㎝、器高5.4㎝を測る。内面はヘラミガキ。11世紀のもの。83はSP83出土。須恵器坏身。復元口径12.1㎝を測る。調整は回転ナデ。Ⅱ期のもの。84はSP84出土。弥生土器甕口縁部で復元口径25.0㎝を測る。85はSP85出土。土師器小皿片で中世のもの。86はSP94出土。須恵器蓋で7世紀後半のもの。87はSP95出土。須恵器蓋で7世紀後半のもの。111はSP25出土。凹基式石鏃で先端と基部を欠損。形態から縄文時代のものか。112はSP64出土。石包丁片。113はSP78出土。凹基の石鏃。

鏃身2.6㎝を測る。111・113の石材は黒曜石。114はSP83出土。方形の小型砥石。各面5面が使用されている。石材は砂岩。115はSP95出土の鉄製品。厚い錆で形状は不明だが、工具のノミかヤリガンナの可能性がある。残存長5.4㎝、幅1.6㎝を測る。

3）第2面の調査

① 柵状遺構

SA01（Fig.8、PL.3）

調査区中央部で検出した柵。斜面の標高に沿って小柱穴が密に東西方向に弧状に連なる。西側第88次調査では未報告で不明、東側第132次調査区では確認出来ず続かない。柱穴は径0.2～0.3mを測り、深さは0.1～0.2mと浅い。出土遺物は柱穴1基から石片が1点出土したのみである。

SA02（Fig.8、PL.3）

SA01南側、3～4mの間隔をとって並行して延びる柵。柱穴の規模・形状はSA01とほぼ同じ。この柵も隣接区では確認出来ていない。**出土遺物**はなかった。

② 掘立柱建物

SB11（Fig.8・11、PL.4・7）

主軸をN-45°30′-Wに取る、梁間・桁行1間×1間の建物。規模は梁間が2.38m、桁行3.10mを測る。柱穴は平面形が不整方形または楕円形で、規模は長軸長が最大で0.65mを測り、深さは0.45～0.65mを測る。柱径は痕跡から15～20㎝である。　**出土遺物**　各柱穴から弥生土器や黒曜石剥片が出土。大半が細片。88～90は弥生土器。88は甕口縁部。復元口径約30㎝を測る。調整はナデで、色調は淡赤褐色を呈す。須玖Ⅱ式のもの。89は鉢口縁部。復元口径17.0㎝を測る。器壁は摩滅するが外面ハケ目が残る。色調は浅黄橙色を呈す。90は蓋頂部片。丹塗りで赤色顔料が一部残る。いずれもP2出土。116は石鎌基部。厚さ0.7㎝で薄手である。調整痕が残る。石材は黒色を呈す粘板岩系である。P2出土。117は棒状の磨石。全長30.8㎝、最大幅10.3㎝を測る。表面は一部敲打痕が残るが、使用による摩滅で滑らかである。また一部に使用擦痕と表面の剥離がある。両端は叩石として使用している。石材は玄武岩。P3出土。

SB12（Fig.8・11、PL.4）

SB11と重複する建物。主軸をN-38°-Wに取る、梁間・桁行1間×1間の建物。規模は梁間が2.55m、桁行3.82m～4.0mを測る。柱穴平面形が不整方形または楕円形で、規模は長軸長が最大で0.4～0.65mを測り、深さは0.15～0.64mを測る。柱径は痕跡から15㎝前後である。　**出土遺物**　各柱穴から弥生土器や黒曜石剥片が出土。大半が細片。118はP1出土。茎を持つ磨製石鏃。鏃身3.5㎝、幅1.7㎝を測る。表面はやや摩滅するが研磨調整。

SB13（Fig.8、PL.4）

北壁にかかる建物。主軸をN-48°-Wに取る、梁間・桁行2間×2間以上の建物。規模は南東柱列3.9m、南西柱列4.17mを測る。柱穴平面形は不整円形または楕円形で、規模は長軸長が最大で0.33～0.55mを測り、深さは0.2～0.6mを測る。柱径は痕跡から15㎝前後である。　**出土遺物**　各柱穴から弥生土器細片が出土。

SB14（Fig.8、PL.4）

北壁にかかる建物。SB11～13と重複する。主軸をN-46°-Wに取る、梁間・桁行1間×2間以の建物。規模は梁間2.6m、桁行4.05mを測る。柱穴は平面形が不整円形または不整方形で、規模は長軸長が最大で0.35～0.6mを測り、深さは0.3～0.35mを測る。柱径は痕跡から15㎝前後である。　**出土遺物**

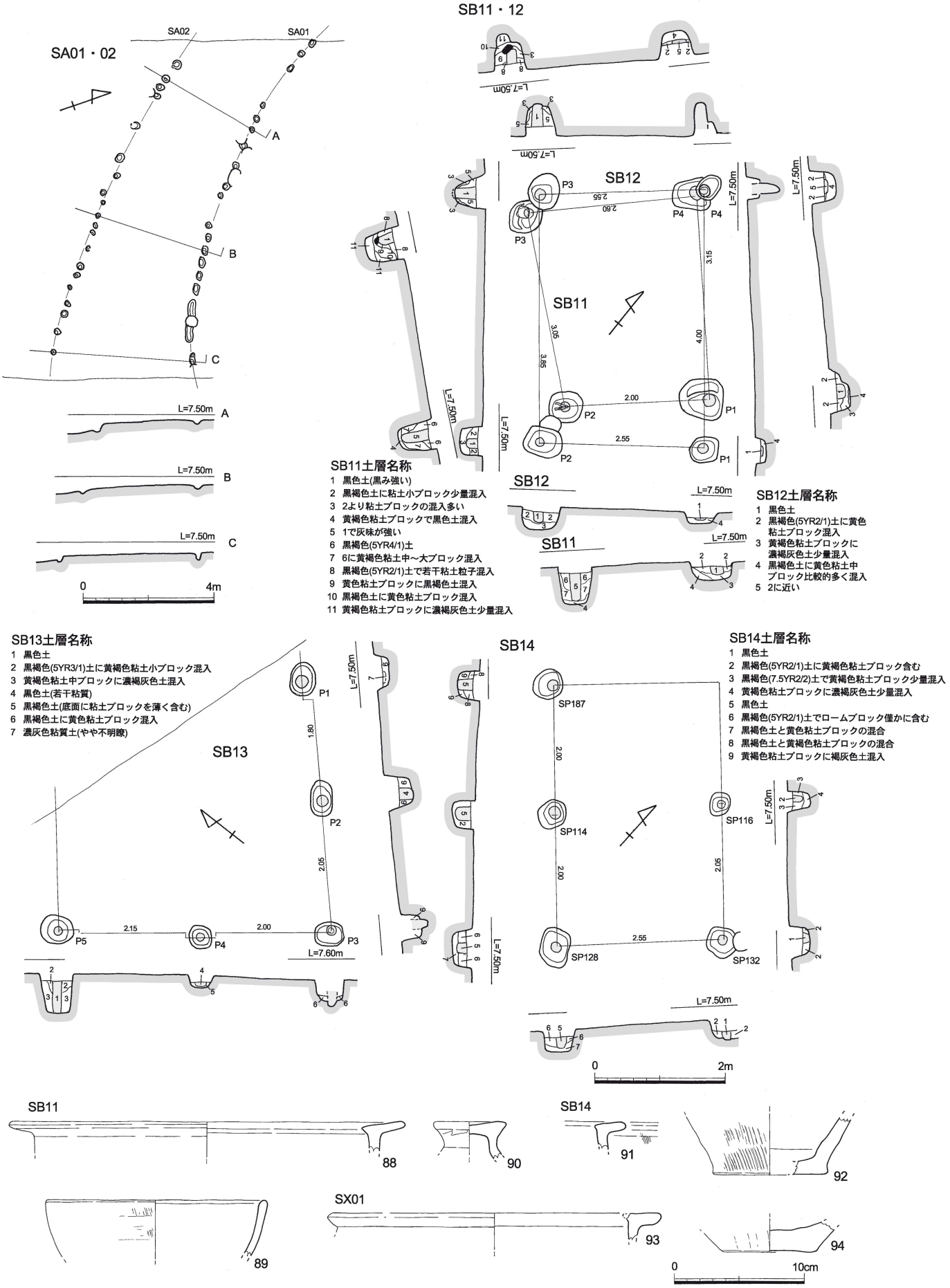


Fig.8 SA01・02、SB11～14、SX01と出土遺物（1/160・1/80・1/4）

各柱穴から弥生時代中期土器片が出土。91・92はP2出土。91は甕口縁部小片。外面ハケ目。92は底部で復元底径8.8㎝を測る。いずれも調整はハケ目。色調は91が橙色、92が鈍い赤褐色を呈す。

③ 石組み遺構SX01（Fig.8・9、PL.5）

南側F5区の包含層下地山面で検出した。0.65×0.6mを測る不整円形の最大深さ5㎝程の浅い落込みに、長さ10～20㎝ほどの大きさの自然礫石を楕円形状に巡らす。外径で0.45×0.5m、内径で0.25×0.3mを測る。埋土は黒みがかった濃褐灰色土で砂質。礫石は薄く赤変し、二次的に被熱している。炉の可能性があるが炭化物・焼土は検出出来なかった。 **出土遺物** 弥生時代中期土器小片と黒曜石剥片が小量出土。93は石組み内出土。鋤先状を呈す甕口縁部で復元口径25.6㎝を測る。器壁は摩滅し調整は不明。94は石組み外西側で出土。壺の底部で底径7.2㎝を測る。胴部外面ヘラナデ。内面指押え痕残る。色調は93が鈍い橙色、94は赤褐色を呈す。

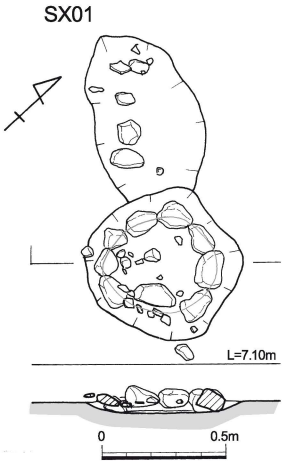


Fig.9 石組み遺構SX01（1/30）

④ ピット出土遺物（Fig.10・11、PL.4・6・7）

104が須恵器以外は弥生土器である。95～97はSP101出土。95は甕口縁で復元口径20.6㎝を測る。調整はハケ目で内面はナデ。96・97は素口縁の鉢。口縁は直または内湾する。復元口径19.4㎝・22.0㎝を測る。98はSP106出土。鉢で口径14.5㎝、器高9.9㎝を測る。外面ハケ目、内面はナデ。99はSP124出土。須玖Ⅱ式の甕。調整は外面ハケ目、内面はナデ。100はSP151出土。器台で口径10.4㎝、器高17.3㎝を測る。調整は外面粗いハケ目、内面はナデ。柱の根占めに使われたのか。101・102はSP152出土。101は逆L字形口縁の甕。復元口径17.6㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面ナデ。

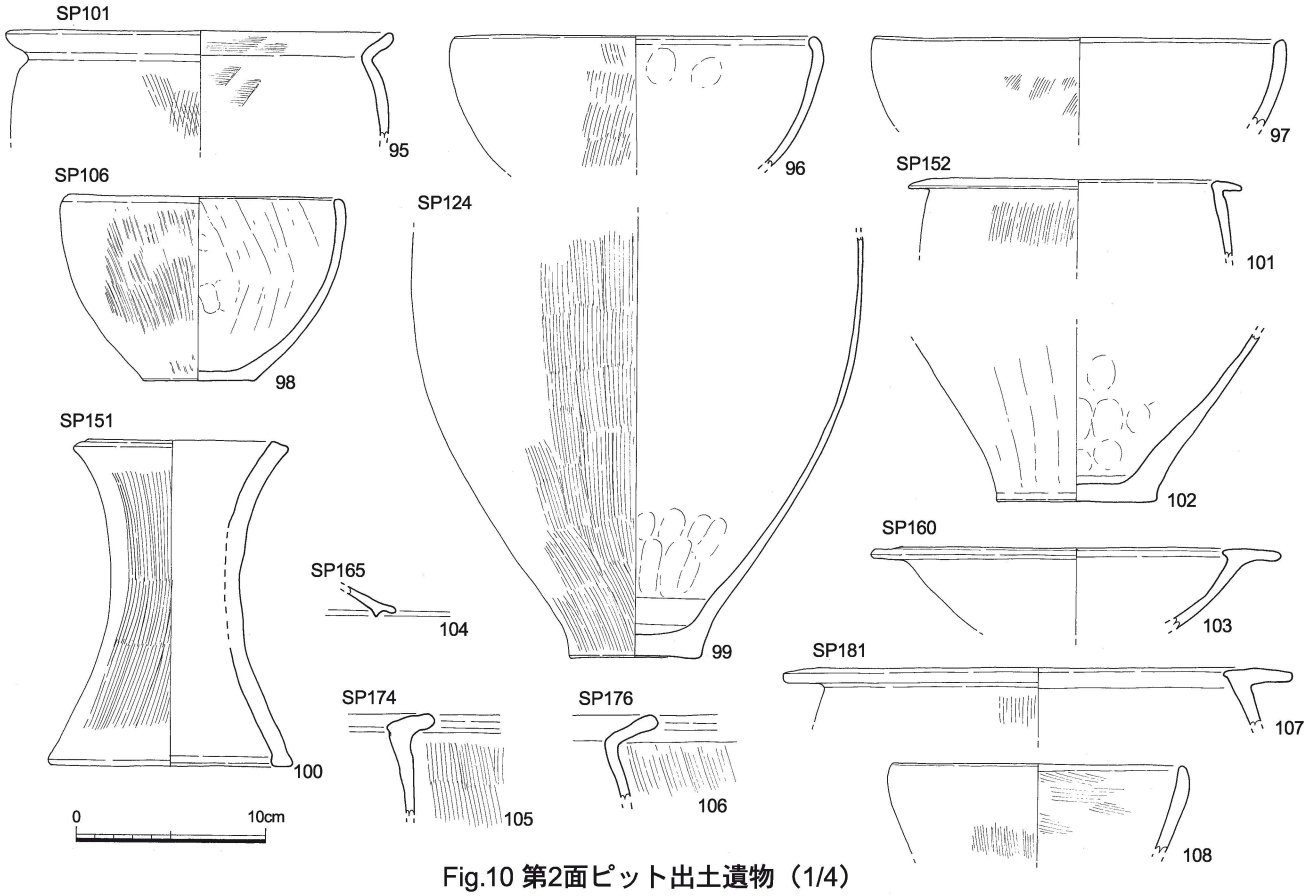
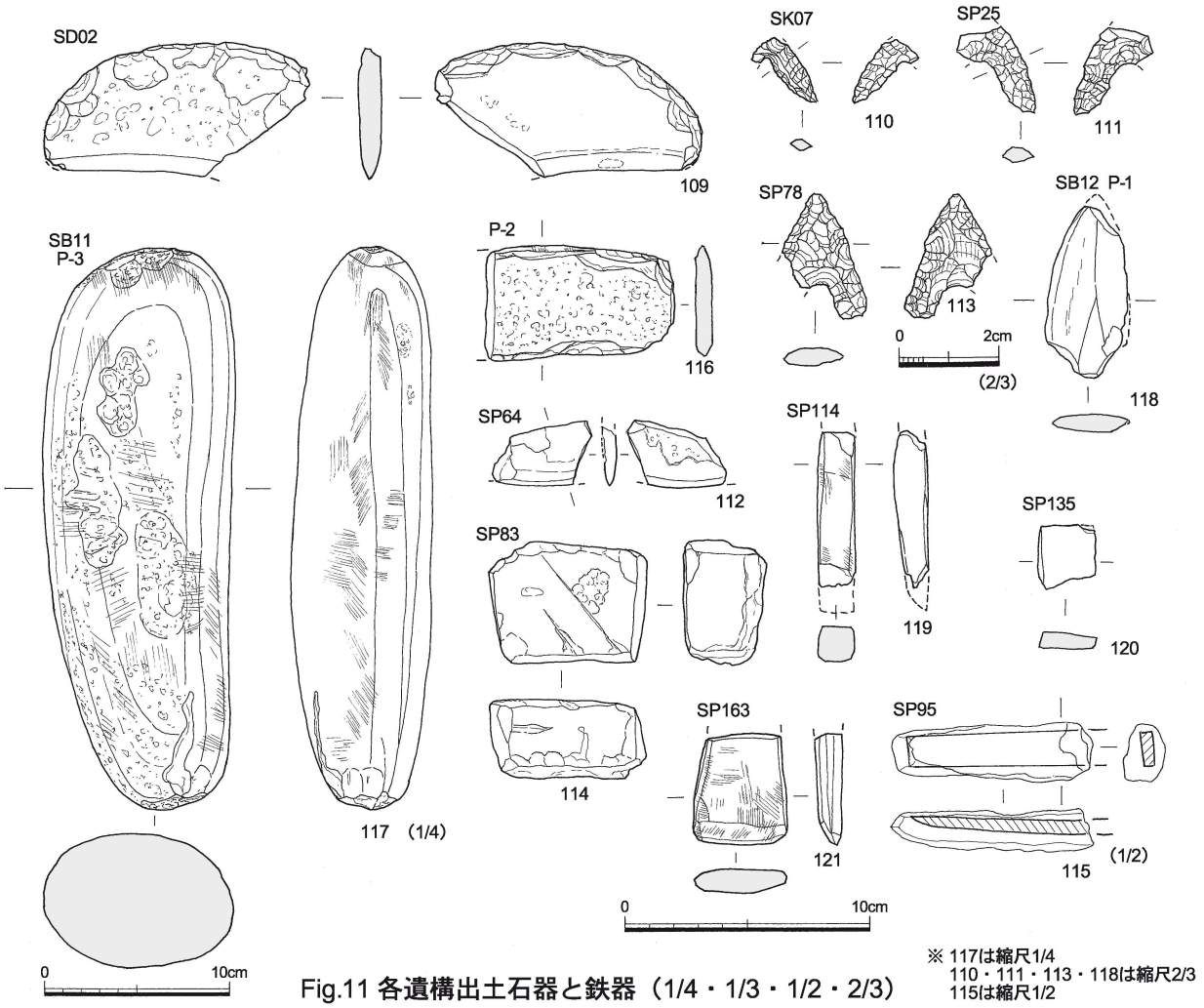


Fig.10 第2面ピット出土遺物（1/4）



※ 117は縮尺1/4
110・111・113・118は縮尺2/3
115は縮尺1/2

Fig.11 各遺構出土石器と鉄器（1/4・1/3・1/2・2/3）

102は底部。調整は胴外面タテナデ、内面はナデ。103はSP160出土。鋤先状口縁の高坏坏部で復元口径21.6㎝を測る。器壁の外面に赤色顔料が残る。104はSP165出土。須恵器で内面かえりが付く蓋小片。7世紀後半のもの。105はSP174出土。甕の口縁部小片。須玖Ⅱ式のもの。106はSP176出土。甕の口縁部。107・108はSP181出土。107は甕口縁部。復元口径27.0㎝を測る。須玖Ⅱ式のもの。108は鉢で口縁はやや歪む。外面ヨコナデとハケ目、内面はハケ目後ナデ。119はSP114出土。磨製の方柱状片刃石斧。欠損するが残存長6.5㎝を測る。丁寧な研磨仕上げで石材は頁岩。120はSP135出土。小型の片刃石斧。石材は頁岩。121はSP163出土。基部が欠損する小型の磨製石斧。残存長4.5㎝を測る。表面は丁寧な研磨仕上げ。石材は安山岩か。

⑤ 包含層出土遺物（Fig.12～24、PL.5～7）

第1面と第2面間に厚さ20㎝の包含層が堆積していた。南側段落ちの遺物は2mグリッド毎取り上げを行った。

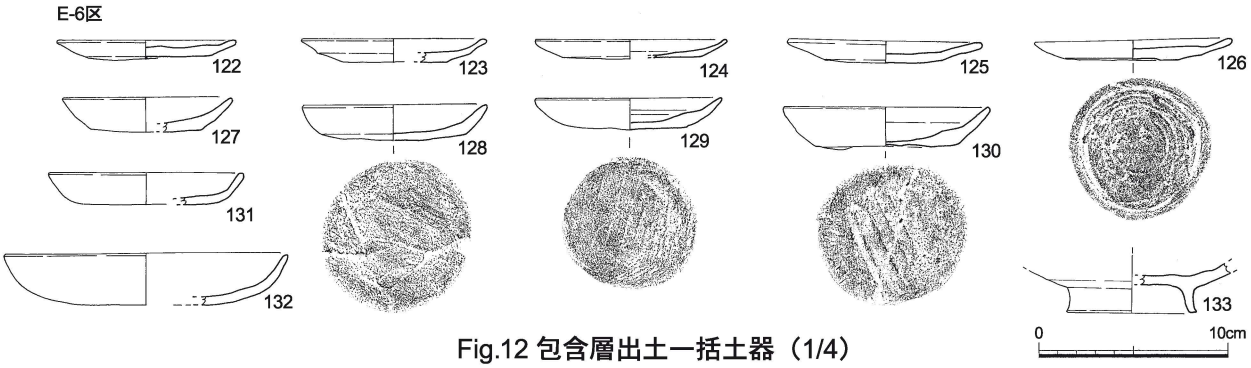


Fig.12 包含層出土一括土器（1/4）

122～133はE6区出土の土器群。土師器小皿は2タイプある。A群は122～126で、口縁が開き、器高が低い小皿。口径は9.5～10.6㎝、器高1.0～1.2㎝を測る。125は口縁内面に凹線を持つ。B群は127～131で、口縁の開きが小さく、器高が高い小皿。口径は9.0～10.9㎝、器高1.7～2.3㎝を測る。器壁は全体に摩滅があるが、外底部は回転ヘラ切りで、128・129・130には板目が残る。以上の土師器でA群は山本信夫氏の中世土師器編年の小皿a2に該当する。これらは10世紀後半のⅨ形式以降で、底部ヘラ切りが存在する12世紀前半以前の間のものと考える。132は丸味を持つ大型皿。復元口径15.0㎝、器高2.7㎝を測る。133は高台付皿か椀の底部で、高台径6.8㎝を測る。10～11世紀か。

134～168は包含層第1層（暗赤褐色土）出土。134～138は古代の土師器で、8～11世紀かけてのもの。134は小皿で復元口径8.8㎝を測る。底部に板目が残る。135は古代の皿で復元口径11.2㎝を測る。136は黒色土器A類椀で復元口径13.6㎝を測る。137は高台の付く坏で復元口径12.6㎝を測る。138は椀で復元高台径8.8㎝を測る。139～145は須恵器。139は高台の付く坏底部。復元高台径8.6㎝を測る。7世紀後半頃のもの。140は坏蓋で復元口径9.8㎝を測る。7世紀前半。141・142は坏身。141は復元口径11.0㎝を測る。ⅣB期のもの。142は復元口径10.6㎝を測る。Ⅱ期のもの。143は甕。外面木目直交タタキ、内面は同心円状の当て具痕で、回転ヨコナデ。144は高台の付く坏。口径11.7㎝、器高5.9㎝を測る。7世紀後半頃のもの。145はⅣB期の低脚の高坏。146～148は土師器。146は牛角状の把手。147は高坏脚部。内外面ヘラケズリ。5世紀のもの。148は頸部の締まりが弱い甕口縁。復元口径15.4㎝を測る。胴外面は粗いハケ目、内面は摩滅し不明。149～153は弥生土器の壺。149・150は須玖式の無頸壺。149は口縁部。150は胴底部で、外面丹塗りである。151・153は鋤先口縁の口頸部。151は復元口径24.8㎝を測る。内外丹塗りで口縁上面にはヘラによる暗文を施す。152は胴底部。胴上部に２条のM形突帯が付く。外面赤色残りは悪いが丹塗りである。153は底部を欠く。口径25.6㎝を測る。頸部に1条の三角突帯が付く。胴外面ハケ目。154は広口の壺。復元口径35.6㎝を測る。155～157は甕。155は口縁はく字状に外折し、復元口径20.6㎝を測る。外面は粗いハケ目。156は破片から全形復元。口径30.8㎝、器高30.2㎝を測る。外面ハケ目でススが付着。底部に穿孔があり甑か。157の口縁部の平坦面が水平に延び、頸部に突帯が付く。口径23.0㎝を測る。内外面丹塗りで、突帯の間に暗文を施す。158は須玖Ⅰ式の高坏坏部。口径は23.8㎝を測る。器壁は剥落するが、内外面丹塗り。159～163はいずれも素口縁の鉢。159は外に開く小型の鉢。復元口径9.0㎝、器高5.4㎝を測る。160～163は椀型の鉢。160～162の復元口径は11.6～17.6㎝を測る。161は内外面丹塗り痕跡が残る。163は平底の底部が残る。復元口径17.6㎝、器高10.4㎝を測る。調整は外面ハケ目。164は頂部が縊れる蓋。調整は外面ハケ目、内面ナデ。165～168は中空の筒状の支脚。165・166の口径は7.5㎝・6.7㎝、器高14.1㎝・13.8㎝を測る。167・168は底部片。外面指押え痕が明瞭に残る。

169～175は第2層暗黒褐色土出土。169は土師器椀。口径14.2㎝、器高6.4㎝を測る。底部は回転ヘラ切り。9世紀後半頃。170・171は須恵器。170は蓋。7世紀後半のもの。171は坏身でⅢB～ⅣA期のもの。172・173は土師器。172は高坏脚部。裾部が外折して開く形態。5世紀のもの。173は黒色磨研の椀。復元口径10.6㎝を測る。外面丁寧なヘラミガキ、内面はナデ。6世紀か。174・175は弥生土器。174は無頸の壺。復元口径12.2㎝を測る。外面から口縁部内面まで丹塗り。175は縊れが中央部にある支脚。完形で口径7.5㎝、器高は14.0㎝を測る。手捏で指押え痕、内面にシボリ痕が残る。

176～192は南側低地部の包含層下層出土。176～180は壺。176は須玖Ⅰ式の小型壺。精製で外面ヘラミガキ。色調は黒色から黒褐色を呈す。177は板付Ⅰ式の壺口縁部細片。178・179は頸部から胴部。179は胴部の境に三角突帯が付く。180は須玖Ⅰ式の鋤先口縁の壺。181～185は甕。181～183は須玖Ⅰ式の甕。181・182は復元口径28.0㎝・29.6㎝を測る。調整は外面ハケ目。183は逆L字

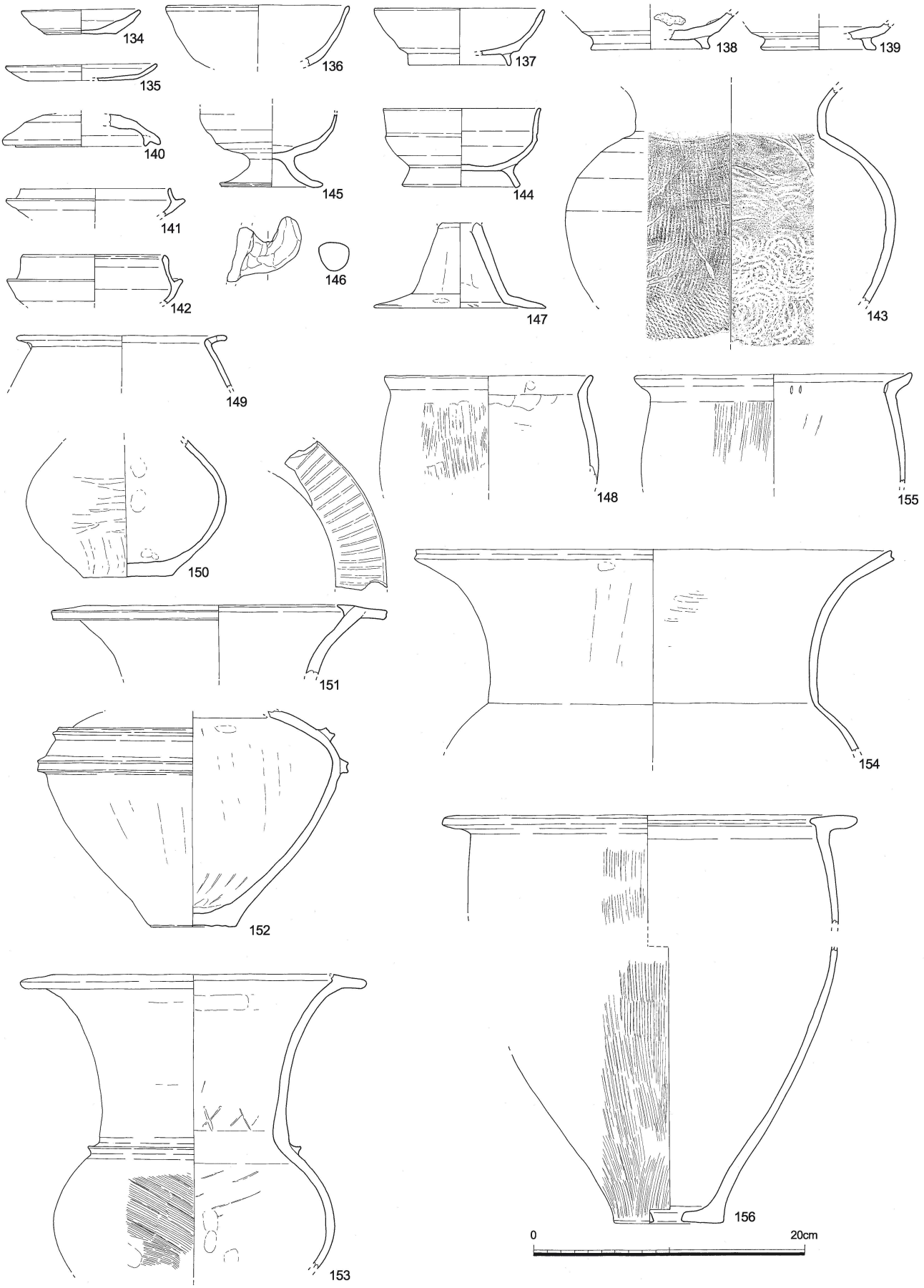


Fig.13 包含層第1層出土土器（1/4）

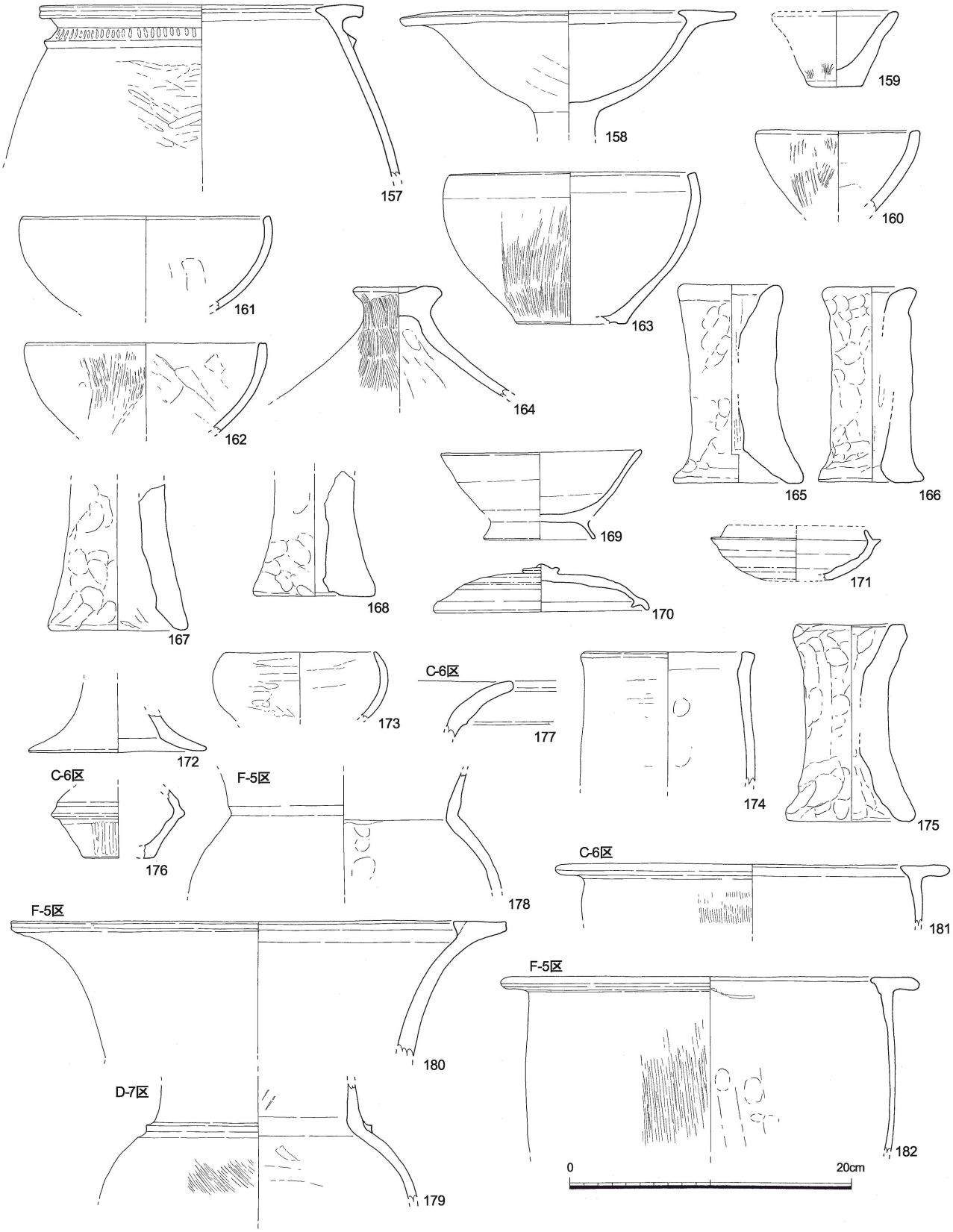


Fig.14 包含層第1層、第2層、下層出土土器（1/4）

形口縁で低い突帯がつく。復元口径32.2㎝を測る。184は須玖Ⅱ式で口がやや締まる。復元口径29.8㎝を測る。調整はハケ目とナデ。185は甕底部。調整は外面ハケ目、内面ナデで指押え痕が残る。186・187は素口縁の鉢。口縁部片で復元口径20.2㎝・22.4㎝を測る。187の調整は外面ハケ目、内面はナデ。188は蓋頂部。189・190は器台。口径9.7㎝・10.0㎝を測る。外面はハケ目。190の内面に指押

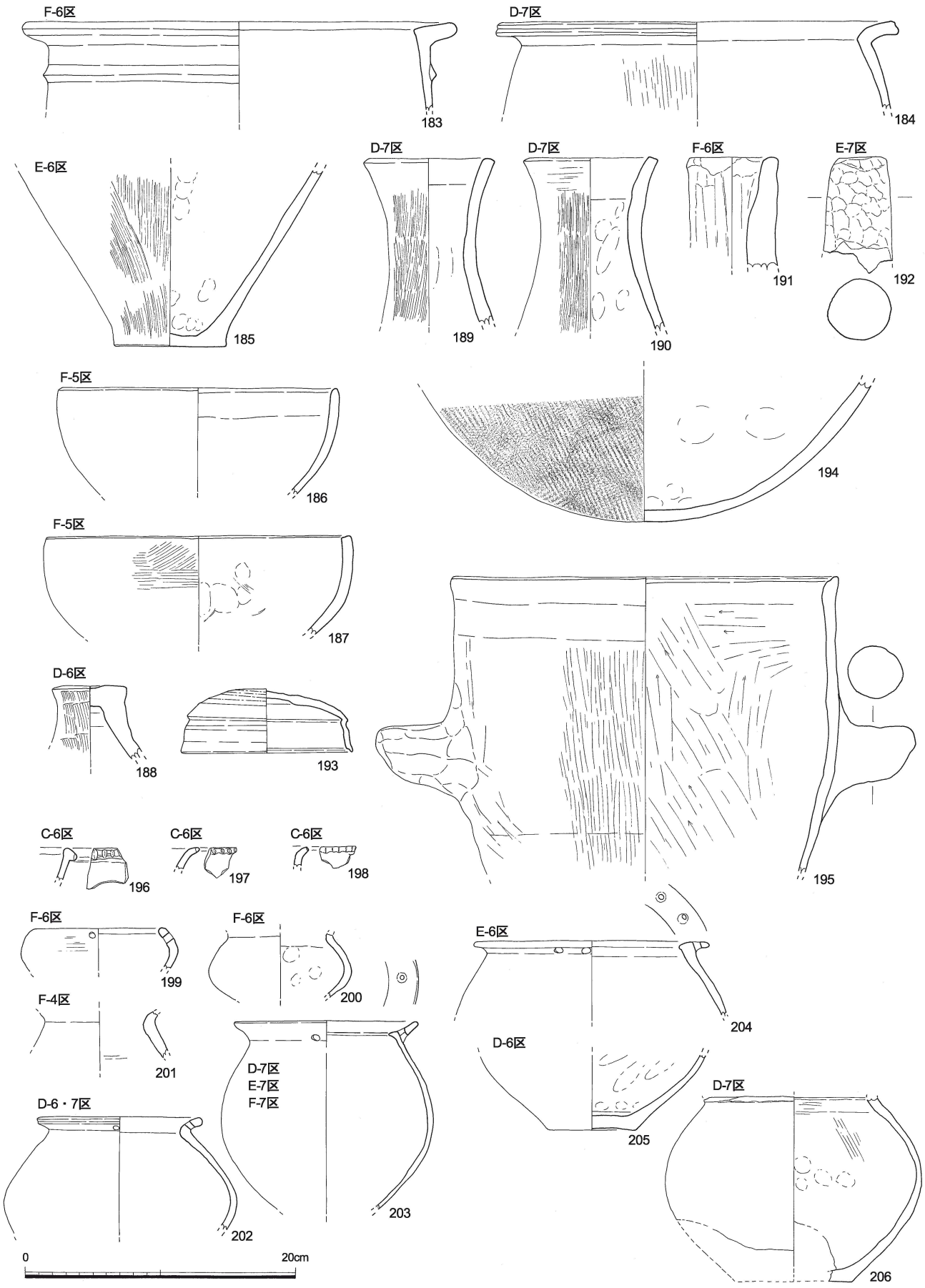


Fig.15 包含層南側下層土器群１（1/4）

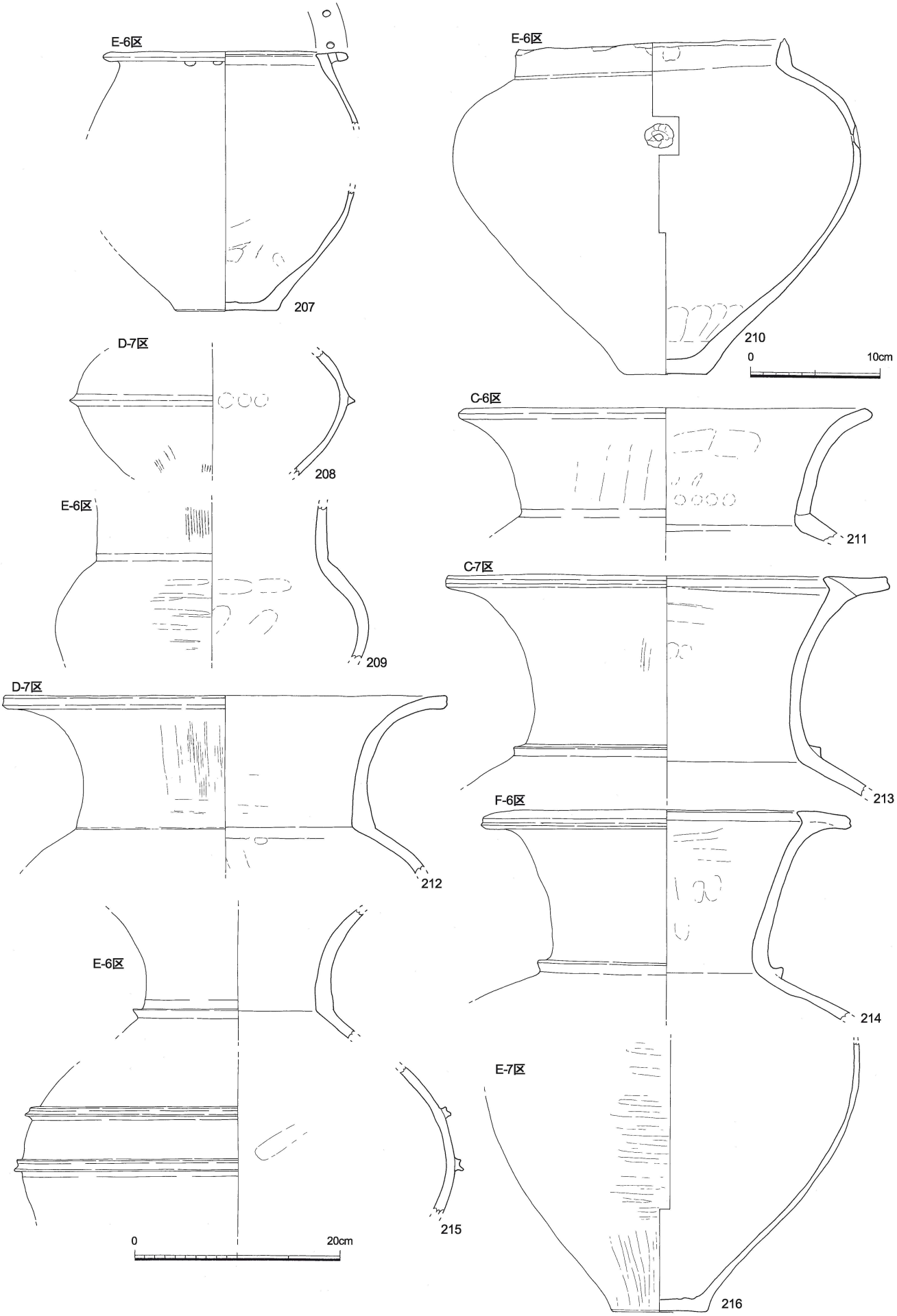


Fig.16 包含層南側下層土器群２（1/4・1/5）　※215・216は縮尺1/5

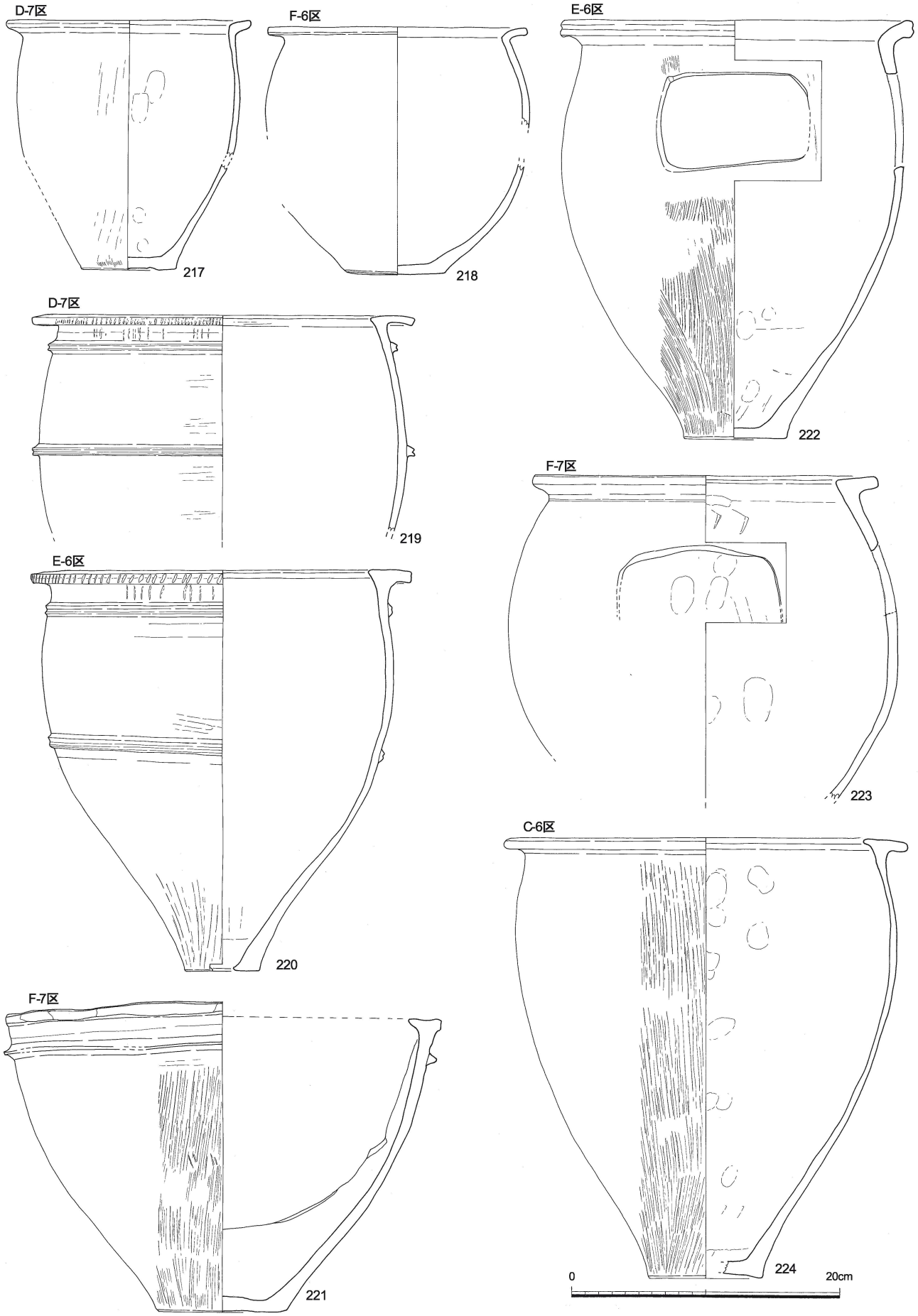


Fig.17 包含層南側下層土器群 3 （1/4）

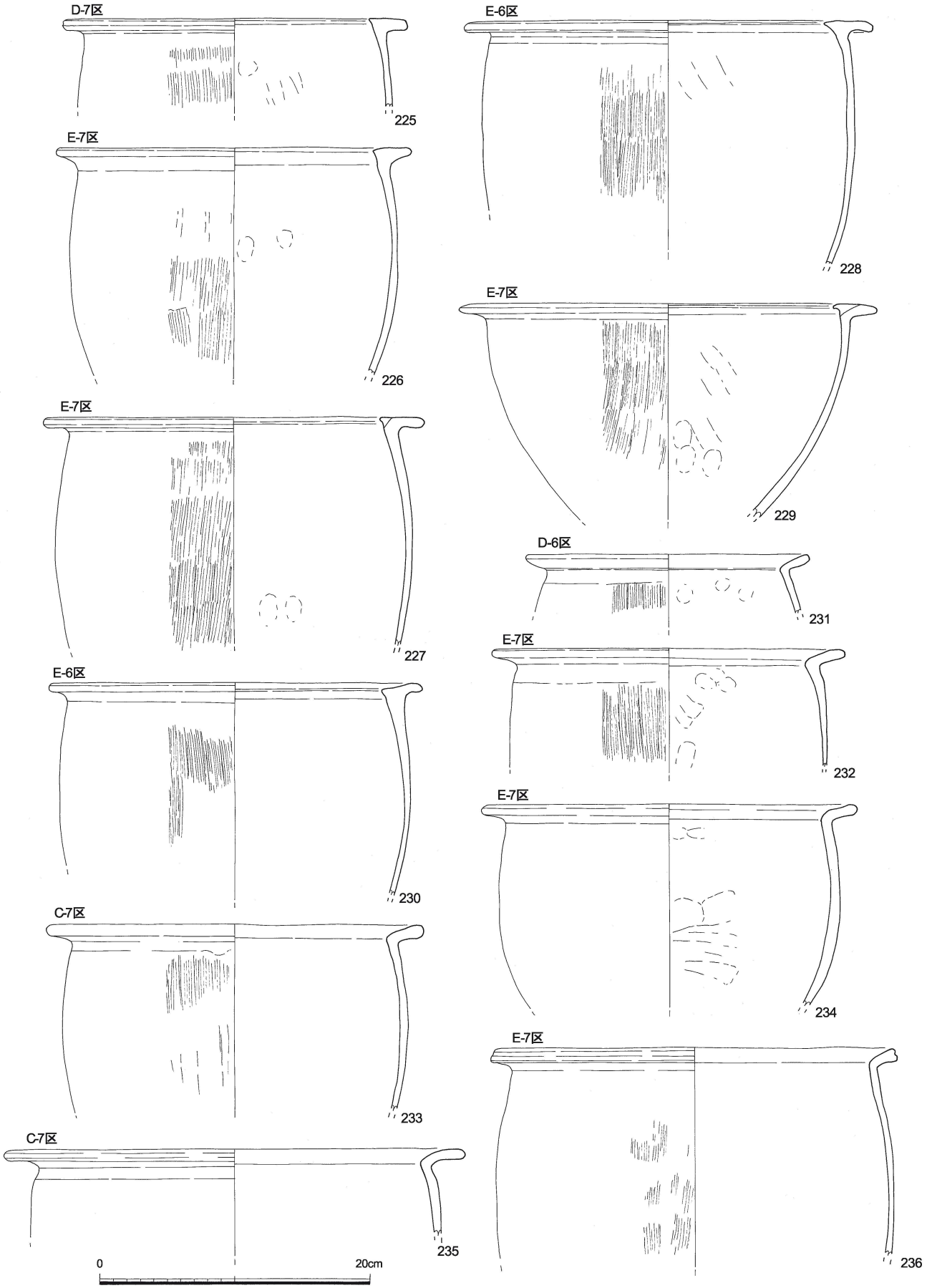


Fig.18 包含層南側下層土器群４（1/4）

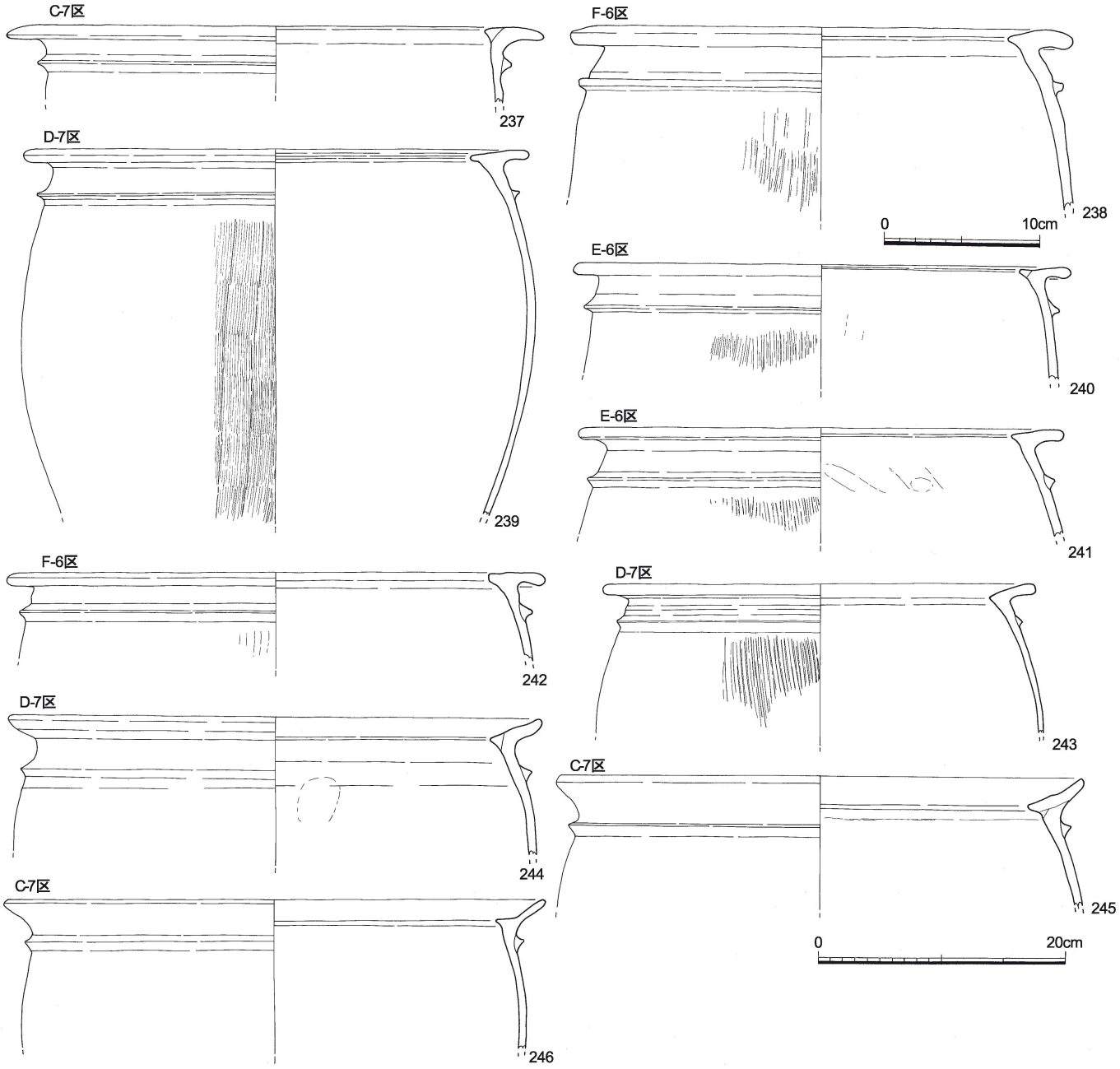


Fig.19 包含層南側下層土器群５（1/4・1/5）　※237・238は縮尺1/4

え痕が残る。191は筒状の支脚口縁部。調整は外面ヘラナデ。192は棒状の支脚。頂部は平坦に仕上げ、側面は指押え。焼成は良好。193～195は段落ち際で出土した古墳時代のもの。193・194は須恵器。193は坏蓋。ほぼ完存で口径12.7㎝、器高4.7㎝を測る。ⅡA期のもの。194は甕の底部。外面木目直交の平行タタキをタテヨコ重ねて密に叩き、その上を部分的にハケを加える。内面当て具痕が残るがナデ消す。195は把手の付く甑。復元口径28.8㎝を測る。調整は、把手部はケズリ仕上げ、胴部はタテ板ナデによる擦痕が残る。内面ヘラケズリ。把手周辺ススが付着する。

196～296は包含層南側土器集中部から出土した遺物。196～198は弥生時代前期の口縁部に刻目を有す甕口縁部細片。196は突帯文土器。197・198は如意形の口縁。199～216は壺。199は丹塗りで口縁近くに円孔がある。袋状口縁壺の一部か。200・201は小型壺。200は外面剥落するが本来は丹塗りか。201は下膨れの胴部で外面丹塗り。202～207は須玖式の胴部球形の無頸壺。器壁が荒れ不明のものもあるがいずれも丹塗り土器である。202～204・207の口縁には蓋を受けるための円孔が

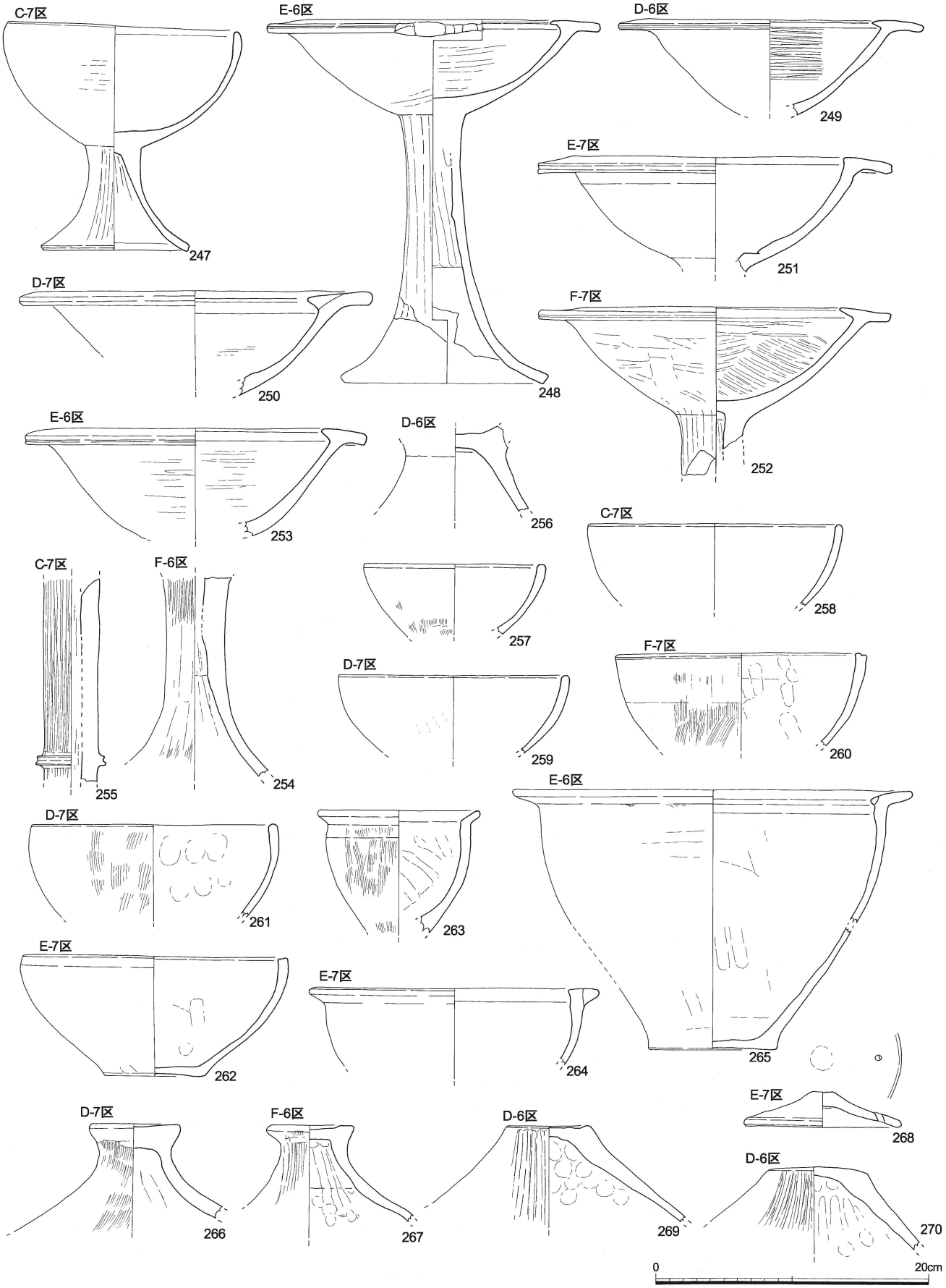


Fig.20 包含層南側下層土器群 6 （1/4）

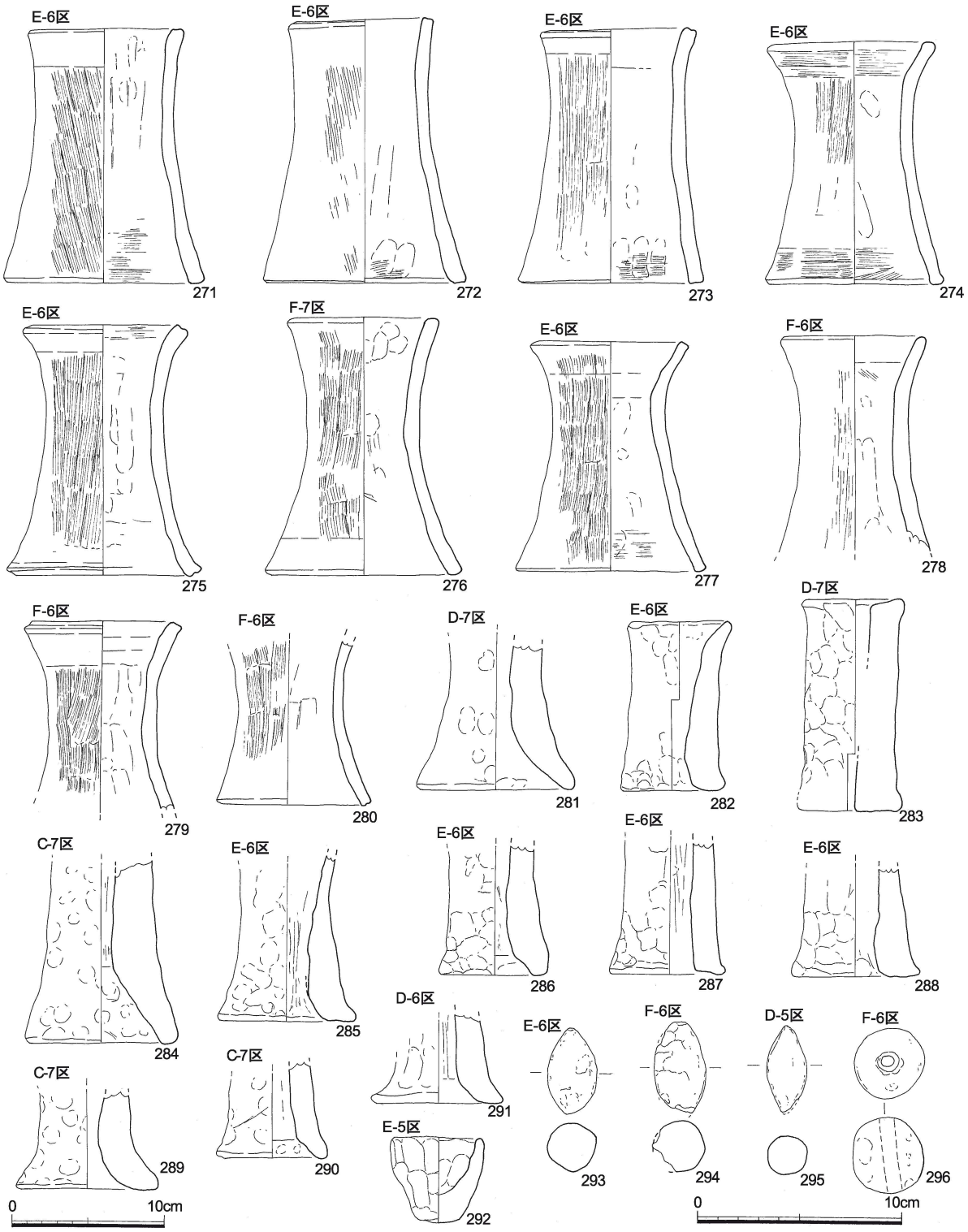


Fig.21 包含層南側下層土器群７（1/4・1/3）　※ 292～296は縮尺1/3

開く。復元口径12.2～17.4㎝を測る。206は口縁部を意図的に打欠いたものである。207は口縁と底部の破片から復元。復元で口径19.0㎝、器高20.0㎝を測る。208・209は胴部。208は偏球で中央に突帯が付く。器壁は荒れるが外面ハケ目が残る。須玖Ⅱ式で本来丹塗りか。209は外面丹塗りヘラミガキ。210は広口の壺の口縁を打欠いたもの。口径21.0㎝、器高26.0㎝を測る。外面僅かに丹塗り痕が残る。上胴部に焼成後の穿孔がある。211・212は広口壺。復元口径31.8㎝・34.2㎝を測る。212は丹塗りで、外面タテヘラミガキ。213・214は鋤先状口縁の壺。215は胴部に2条、頸部に1条の突

帯が巡る。216は胴底部で、外面ヘラミガキで丹塗り。217～220は甕で弥生時代中期中頃～後半の須玖式土器である。217は復元口径18.2㎝、器高18.6㎝を測る。器壁はハケ目とナデ。218は丹塗りで、復元口径19.4㎝、器高18.4㎝を測る。219・220は口縁部に刻目、頸部と胴部にM型突帯が付く。口径28.4㎝・28.5㎝、器高30.0㎝を測る。丹塗りで、外面頸部にヘラの暗文、胴部はヘラミガキ。221は鉢で口縁部を打ち欠く。口径32.5㎝、器高23.2㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面ナデで、外面ススが付着。222・223は胴部上半に方形の窓がある。222は口径26.3㎝、器高31.3㎝、窓は7.5×(11.5)㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面はナデ。224～230は鋤先状口縁。224は図上復元で口径30.0㎝、器高33.0㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面ナデ。225～228は口縁から胴部片。調整は外面タテハケ目、内面ナデ。229は鉢形に開き、230は口縁部がやや締まる。231～236は口縁が逆L字形を呈す形態。調整は外面ハケ目、内面はナデ。口径は21.0～34.0㎝を測る。236は口縁端部に浅い凹線が巡る。237～246は頸部に三角突帯が付く中～大型の甕。237～242は口縁が鋤先状を呈す。口径は32.4～43.4㎝を測る。243～246は屈折して端部が立ち上がる形態で口径は34.8～43.6㎝を測る。器壁があれ調整不明のものもあるが、外面ハケ目、内面はナデ。247～256は高坏。255以外、いずれも外面ヘラミガキで丹塗りである。247は坏部が素口縁で半球形の形態。口径18.0㎝、器高16.7㎝を測る。248～253は鋤先状口縁の形態。口径は22.0～25.8㎝である。248は全体が残る。口径24.4㎝、器高26.6㎝を測る。口縁部一部意図的な打ち欠きか。255は長脚の脚部でM形突帯が付く。突帯上部にはヘラによる刻み目がつく。256は弥生時代前期のもので、坏と脚部の境に突帯を巡らす形態か。257～265は鉢。半球形の素口縁のもの257～262と、屈折する口縁のもの263～265の2種類がある。口径は前者が13.4～19.4㎝、後者が11.9～29.2㎝を測る。調整は器壁が荒れ不明のものもあるが、外面ハケ目かナデ、内面はナデ。266～270は蓋。形態は頂部の摘み部が縊れるもの266・267と頂部が平坦で笠形を呈すもの268から270に分かれる。268は小型の無頸壺に対応するもの。復元口径11.6㎝。外面赤色顔料が一部残り丹塗りである。円孔が1か所残る。271～281は器台で胴部が縊れる筒形の形態。口径は9.4～10.9㎝を測る。調整は外面ハケ目、内面はナデで指押え痕が残る。282～291は支脚。中空の円柱状の形態。口径6.7～6.8㎝、器高11.0～13.8㎝を測る。手捏で外面指押え痕が明瞭に残る。292はほぼ完存の手捏ね土器。口径4.6㎝を測る。293～295は土製投弾。全長4.2～4.5㎝を測る。296は球形の土錐。孔は焼成前穿孔。

297～338は石器類で、各層まとめて報告する。297～306は石斧類。297は残存長11.0㎝を測る。刃部は使用で潰れている。石材は花崗岩質か。298は破片の転用品か。299は表面の欠損が著しい。残存長11.9㎝を測る。研磨仕上げで下端に刃部が僅かに残る。300は石斧の再加工品か。下端に意図的な二次調整を加えている。298～300の石材は玄武岩。301は磨製石斧基部片。302は小型方柱状片刃石斧片。断面は長方形を呈す。表面は欠損するが研磨。石材は頁岩。303は磨製の扁平片刃石斧片。残存長3.0㎝を測る。石材は粘板岩。304は柱状片刃石斧の一部。305は扁平片刃石斧。欠損が激しいが、残存長7.3㎝を測る。304・305の石材は頁岩。306は片刃石斧の刃部。石材は砂岩系か。307～309は石包丁。307は紐孔部片。308・309は外湾刃半月形の石包丁。308は端部を欠損し残存長12.2㎝、両孔間は2.5㎝を測る。石材は輝緑凝灰岩。309は未製品か。310は石鎌基部で刃部が残る。311は刃先である。312は打製の石鎌未製品か。全長13.7㎝、最大幅4.1㎝を測る。粗割した石材に敲打調整を行い、側面に二次調整を加え、表面は軽く擦っている。310～312の石材は粘板岩などの堆積岩。313～321は砥石。小型の仕上げ砥と大型の荒砥がある。313～315は小型の砥石。313は下端を欠損し、残存長3.2㎝を測る。各面使用で擦られている。石材は花崗岩。314は長方形の砥石片。上面使用擦痕が残る。石材は頁岩。315は柱状片刃石斧を再使用した砥石。各面使用している。石材は

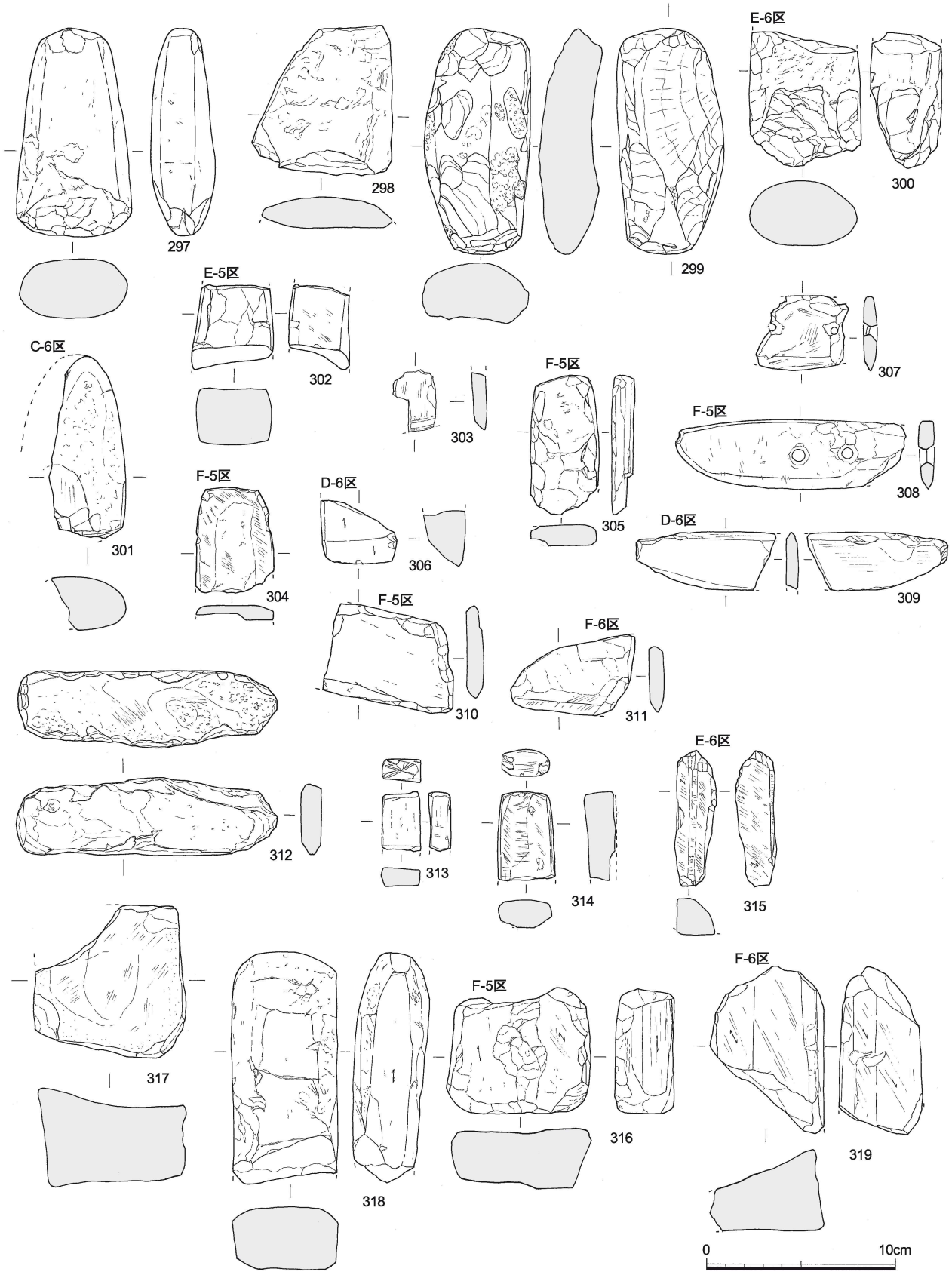


Fig.22 包含層出土石器１（1/3）

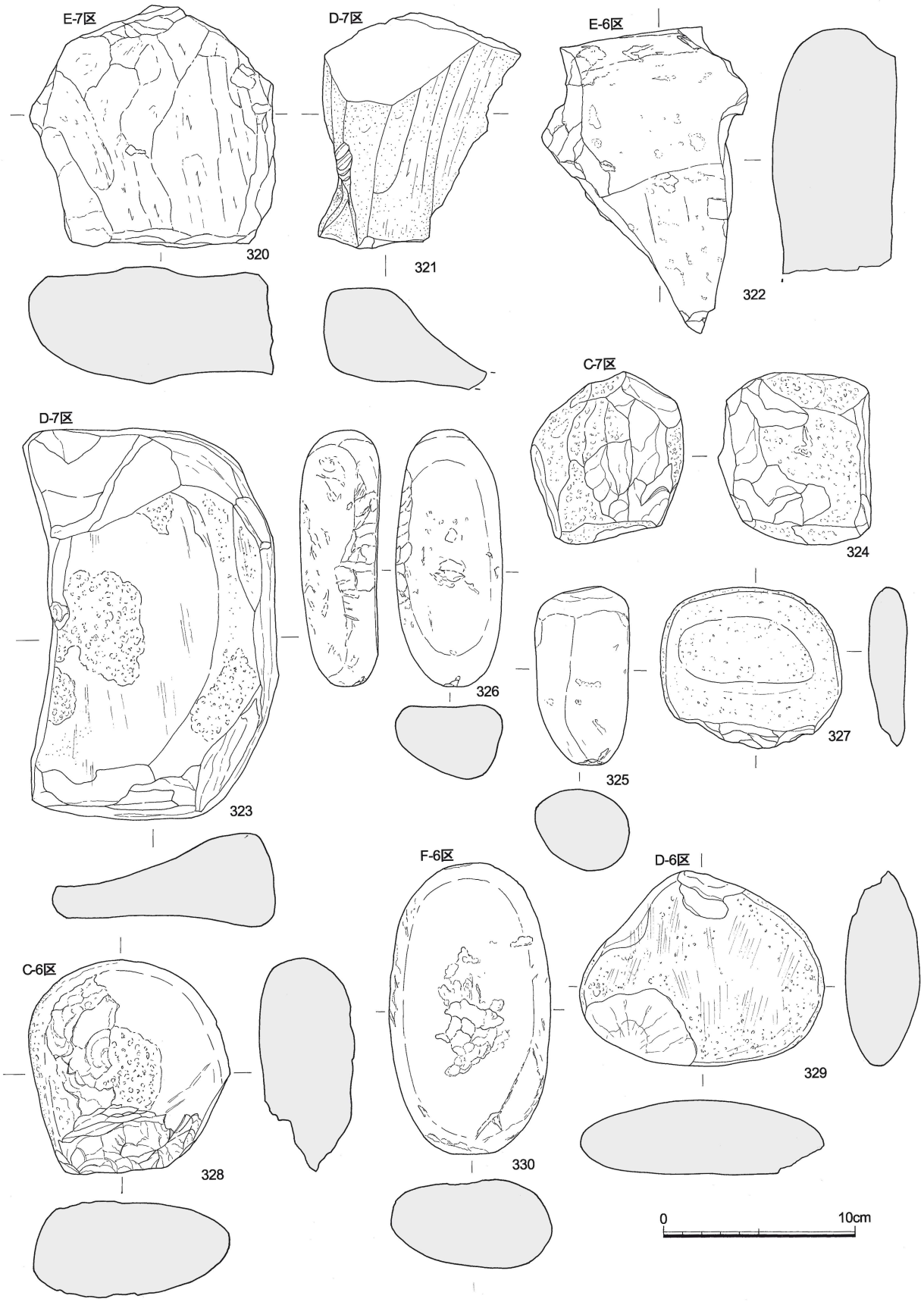


Fig.23 包含層出土石器２（1/3）

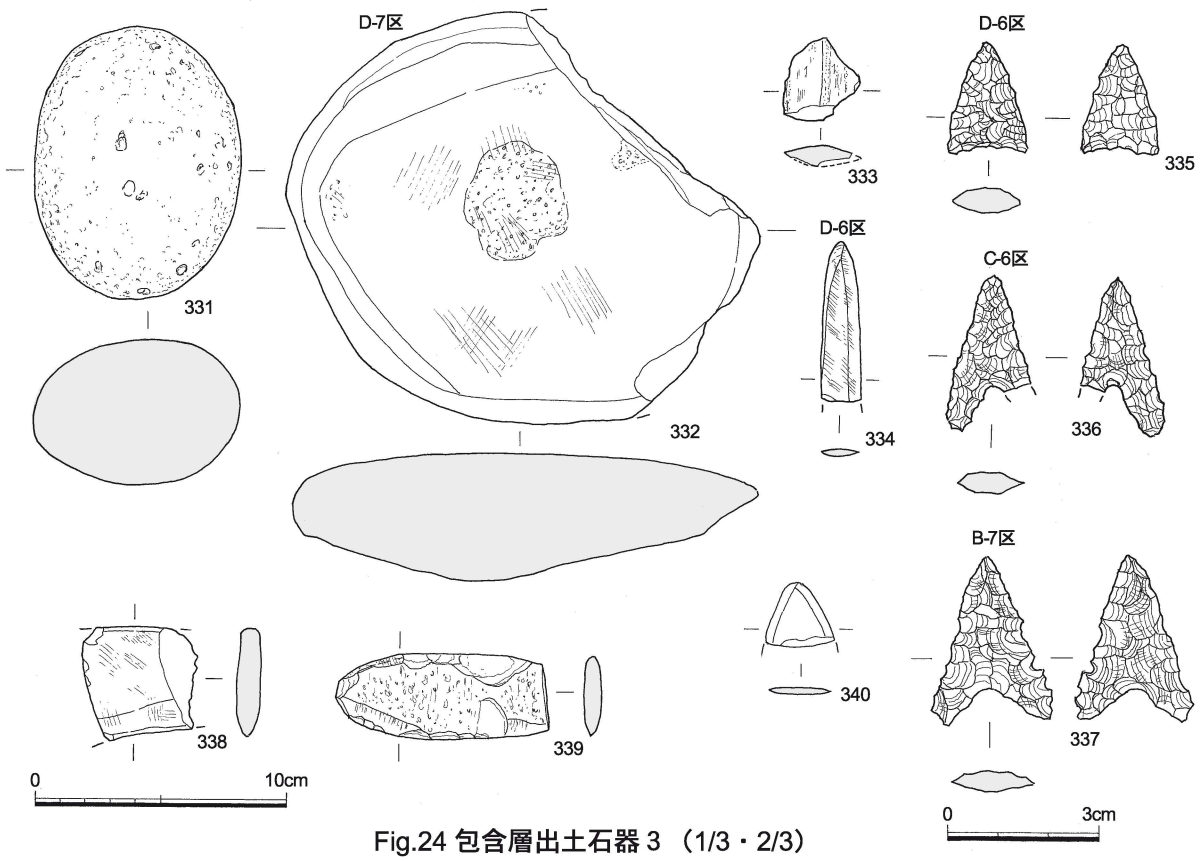


Fig.24 包含層出土石器３（1/3・2/3）

頁岩。316～321は中～大型の砥石。いずれも破片である。316は方形を呈す凹石を転用した砥石。各面使用で擦られているが、使用による窪みがある。石材は砂岩。317は使用により中央が磨り減っている。石材は砂岩。318は石斧転用の砥石。残存長12.2㎝を測る。各面使用で擦られている。石材は玄武岩か。319は破片。使用による磨り減る。石材は砂岩。320は上面を使用し摩滅している。321は使用に摩耗が激しい。石材はいずれも砂岩。322は台石片。残存長16.3㎝を測る。石材は片岩か。323は石皿か。中央部が使用で磨り減り、薄くなっている。残存長20.6㎝を測る。また中央部には敲打使用痕が明瞭に残る。石材は砂岩。324～332は叩石。324は円礫を粗割したもの。敲打痕が残る。石材は緑泥片岩。325は棒状の形態。長さ9.3㎝を測る。両端使用痕跡がある。石材は斑糲岩か。326は長楕円形状で全長13.5㎝を測る。表面には使用擦痕や打撃痕が残る。327～329は円礫の一部を使用したもの。327は表面軽く擦る。328は上下両面に使用による窪みがある。329は叩石または磨石。平面形が栗形を呈す。328・329の石材は玄武岩。330は楕円形状で全長15.3㎝を測る。上下両面に使用痕が残る。石材は花崗岩。331は楕円形状の磨石で、全長10.8㎝を測る。表面は使用により摩滅し滑らかである。石材は火成岩系か。332は磨石か台石。一部欠損するが残存長18.8㎝を測る。下面は粗割で雑な調整であるが、上面擦られ使用による打撃痕が残る。石材は緑泥片岩か。333は磨製石剣の細片。石材は頁岩。334は磨製石鏃か石剣片。残存長6.3㎝を測る。斜め方向の研磨。石材は安山岩か。335～337は黒曜石石鏃。335は平基。鏃身2.2㎝を測る。336・337は凹基。336は基部を欠損。鏃身3.2㎝を測る。337は鏃身3.4㎝を測る。

338～340は出土地不明。338は磨製石鎌片。339は不明未製品。残存長8.6㎝を測る。上下両側面研磨を加える。340は磨製石鏃の先端。残存長1.3㎝を測る。研磨仕上げ。石材は頁岩か。この他包含層から旧石器時代のサヌカイト剥片１，黒曜石剥片1、チップ1が出土している。

3. まとめ

ここでは整理してまとめとする。今回の調査区では遺構面は２面確認した。

上面第１面は建物１棟と溝２条、土坑９基を確認した。遺構の時期は古墳時代後期から中世後半である。建物は８世紀の遺物を含むが、東側の第132次の建物群と主軸方向が異なる。時期が違うのであろうか。溝はSD01が古墳時代、SD02が古代か。土坑は古墳時代後期～中世にかけてである。SK09は中世初め。柱穴からは15世紀頃までの遺物が出土している。

第２面は基盤のローム土面で検出した遺構面である。検出遺構は建物４棟、柵２列、石組み遺構１基である。遺構の時期は弥生時代である。建物柱穴からは弥生土器が出土し、出土遺物が比較的多いSB11やSB14からは弥生時代中期後半頃の須玖Ⅱ式土器が出土しており、中期後半頃の建物群と考える。柵は出土遺物がないが、同時期であろう。石組み遺構は弥生時代中期須玖Ⅰ式の時期である。

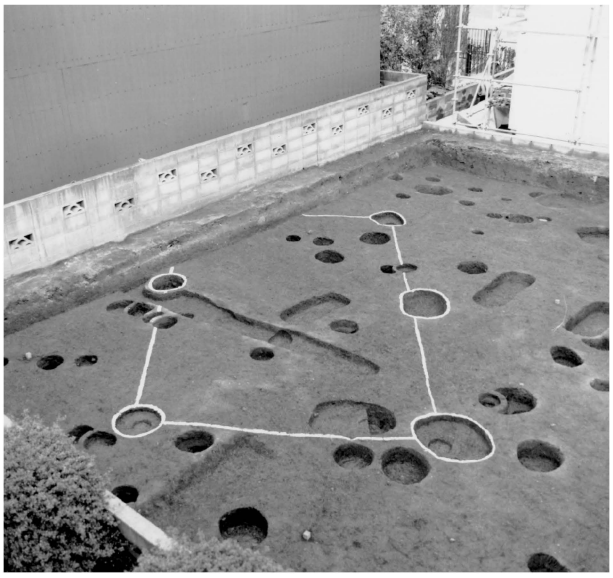
第１面下で確認した包含層には弥生時代前期から古代、中世前半迄の遺物を含んでいた。遺構の見落としがあったものと思われる。また第２面南側段落ち下では多量の弥生時代中期の須玖式土器を含む土器群を検出した。土器の中には多数の丹塗り土器や窓付きの土器など特殊なものもあり、祭祀として廃棄された土器群であった可能性がある。東側第132次調査区では弥生時代の遺物はあるものの遺構はなく、大型建物建設時に地山造成を行い削平したことが考えられる。

Fig.25 第132次・第137次調査区測量図（1/200）

第137次調査

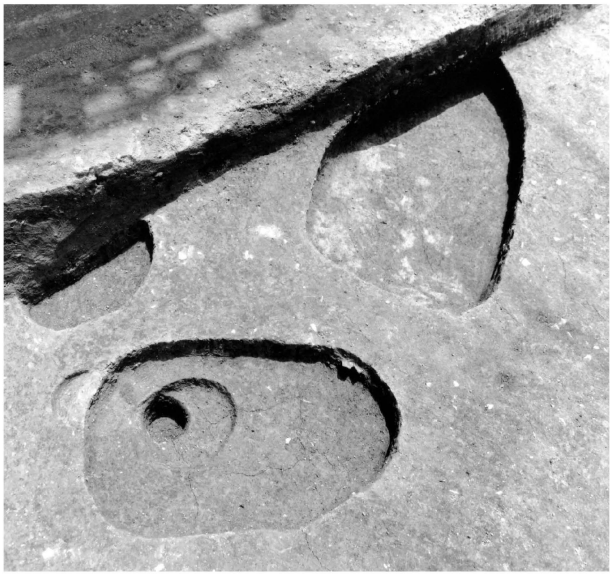
（1） 第137次調査区全景（南から）

（2） 第1面全景（南から）



（1） SB01（西から）

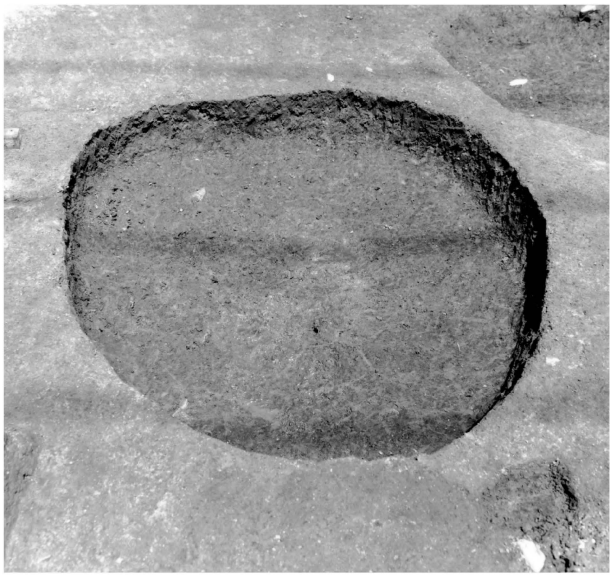
（2） SD02（西から）



（3） SK01・02（北西から）

（4） SK03・04（東から）

（5） SK07・08（東から）



（6） SK06全景（南から）

（1） 第2面全景（南から）

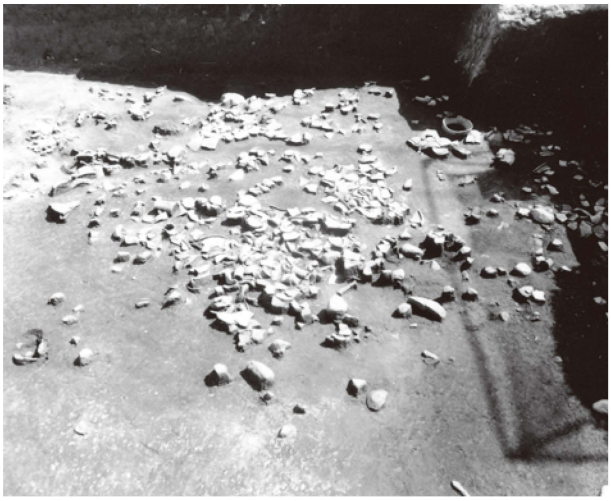
（2） 第2面包含層完掘後全景（南から）

（1） SB11～14検出状況（西から）

（2） SP82遺物出土状況（北から）

（3）SP151遺物出土状況

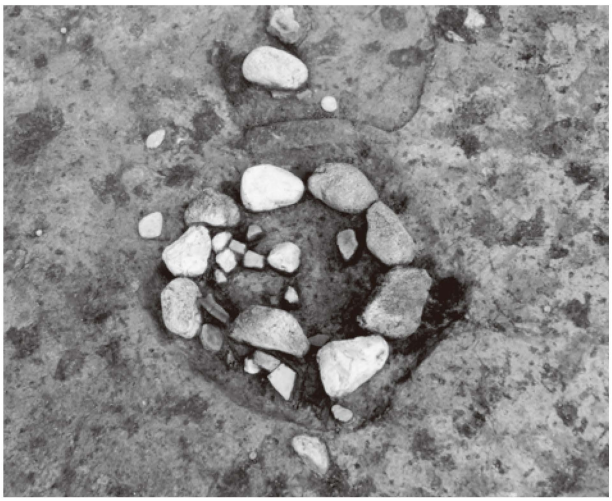
（1） 南側段落ち部土器群の状況（西から）



（2） 同　出土状況（北から）

（3）一括土器出土状況（東から）

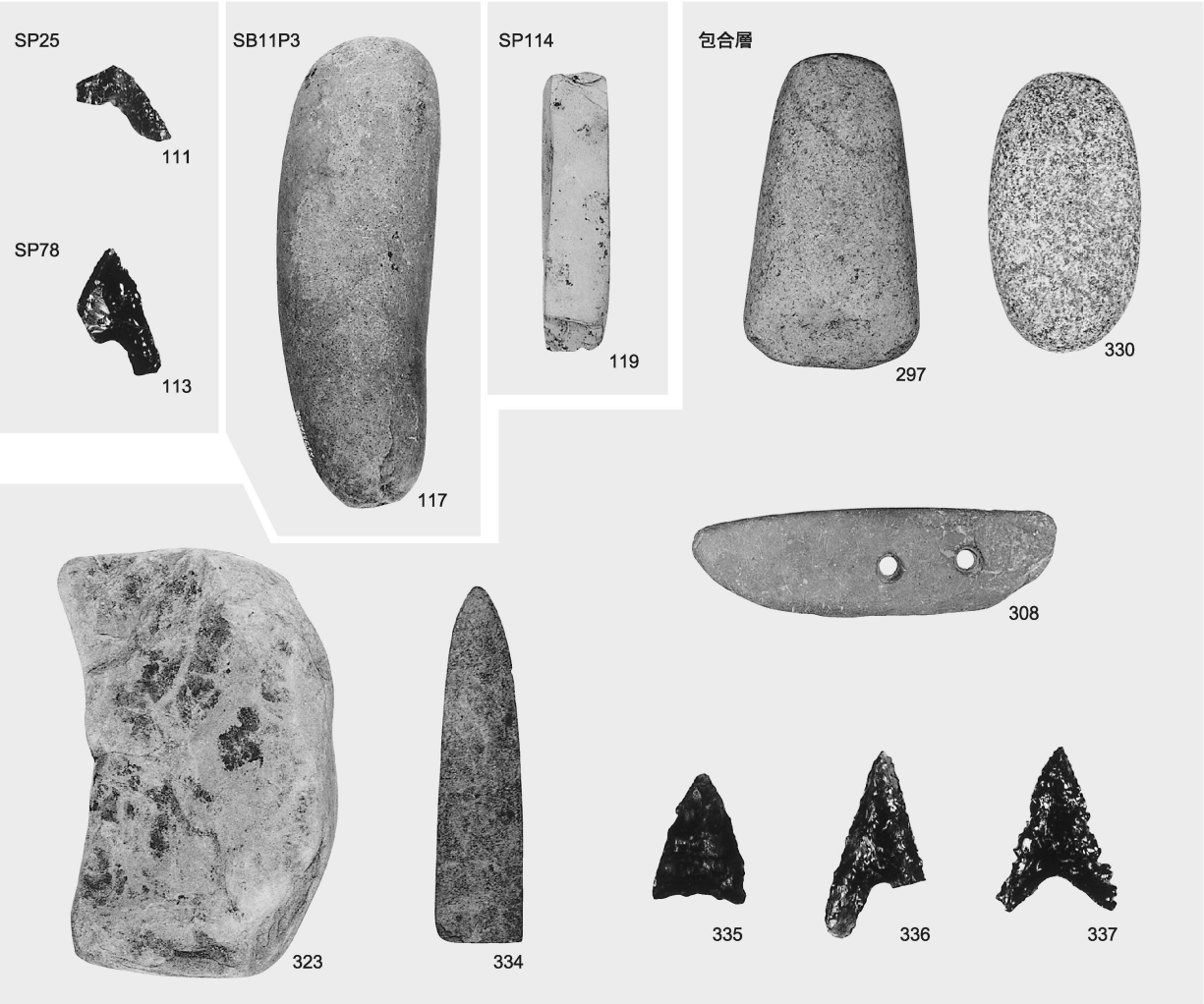
（4） 古墳時代遺物出土状況（南から）



（5） 石組み遺構SX01（東から）

各遺構出土土器（縮尺不統一）

（1） 包含層出土土器・土製品（縮尺不統一）



（2） 各遺構出土石器（縮尺不統一）